新聞づくりを通して海と島でできた日本を学ぼう！

うみやまかわ新聞

りしりとう
利尻島
北海道利尻町
利尻富士町

ひのはらむら
檜原村
東京都檜原村

うみやまかわ新聞は

日本をつなぐ「海」「山」「川」を

キーワードにした新聞です

全国の子どもたちが

それぞれの地域を取材しました

さまざまなうみ・やま・かわと

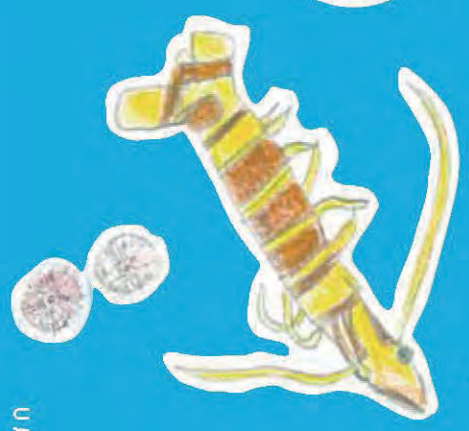
身近なうみ・やま・かわを比べ

広い海に浮かぶ島国の恵みや

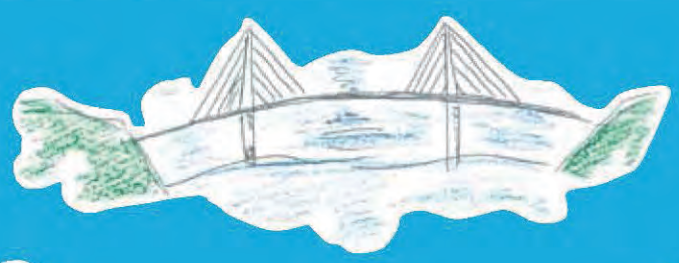
同じ日本にある地域の

「つながり」や「ちがい」を

感じてください

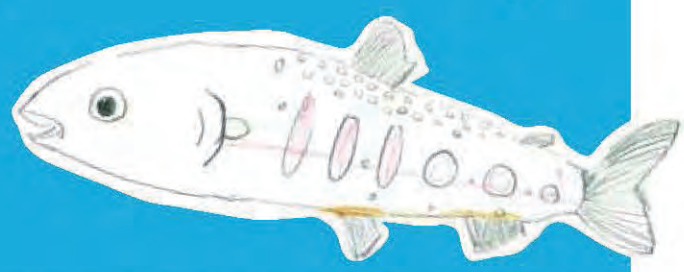


かみじまちょう
上島町
愛媛県上島町



なかつえむら
中津江村
大分県日田市

よなくにじま
与那国島
沖縄県与那国町



2014年度

UMI YAMA KAWA

www.umiyamakawashinbun.net

私たちが暮らす日本は
広い海とたくさんの島でできていて
一つひとつの地域に特徴的な自然や文化があります

『うみやまかわ新聞』は新聞づくりを通して
海と島でできた日本を学ぶプロジェクトです
２０１４年度版は全国５地域の小学生・中学生がつくりました

はるか３０００kmの距離がある利尻島と与那国島は
同じ日本でありながら、たくさんの「違い」があり
その中間にある上島町には日本や世界につながる仕事があります
海から離れた檜原村や中津江村でも、暮らしや自然に目を向けると
海とのつながりを発見することができます

新聞を読みながらイメージしてみましょう
この島国にはどんな恵みがあり、つながりがあるのか
各地の「うみ」「やま」「かわ」を知ることで
きっと、海と島の恵みを知ることができるでしょう

① 利尻島／北海道

日本の北端にある利尻島は「利尻こんぶ」をはじめウニやアワビなどの海産物が採れる島。島の中央には1,721mの利尻富士がそびえ、多様な生物が暮らす山や沼があります。

人口 5,013人
（H26.11月時点 利尻町、利尻富士町合計）

面積 182.19㎢
（利尻町、利尻富士町合計）

② 檜原村／東京

東京都の本土側で唯一の村。標高1,000～1,500mの高地にある林業が盛んな村には、日本の滝百選に選ばれる「払沢の滝」があり、東京の源流となる美しい水が涌き出ています。

人口 2,379人
（H27.1月時点 檜原村）

面積 105.42㎢

③ 上島町／愛媛県

瀬戸内海のほぼ中央に位置する上島町は、弓削町・生名村・岩城村・魚島村の4町村が合併し、誕生した町。弓削島、生名島、岩城島、佐島、高井神島、魚島など25島からなる町です。商船高等専門学校があり、船乗りが多く「造船」が盛んです。

人口 7,409人
（H26.10月時点 上島町合計）

面積 30.42㎢

④ 中津江村／大分県

九州北部の中央に位置する中津江村は、日田市に属する山間地域。地域内には貴重な原生林が残り、玄界灘にそそぐ筑後川の源流として美しい水が湧いています。

人口 901人
（H26.12月時点 中津江村自治会合計）

面積 81.91㎢
（日田市全体では666.19㎢）

⑤ 与那国島／沖縄

日本最西端に位置する与那国島は、台湾までわずか111km。多種多様な生物が暮らす海、山、川、谷、湿地があり、独自の伝統文化が色濃く残っています。

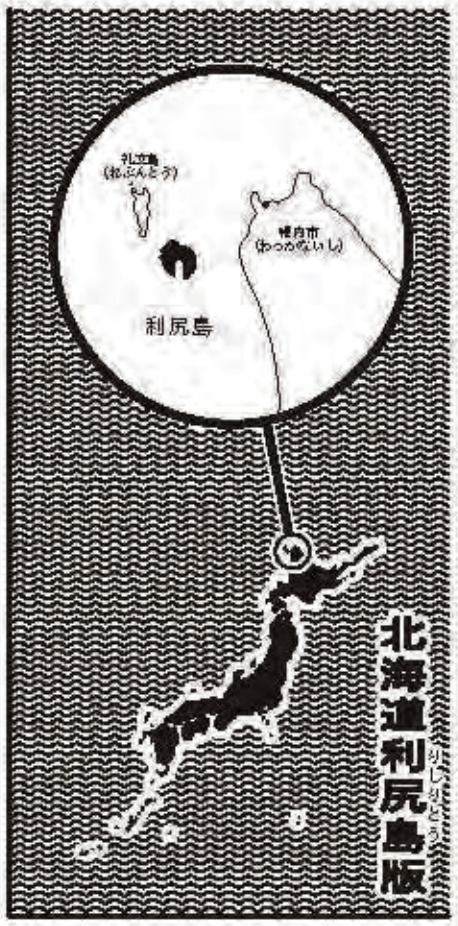
人口 1,497人
（H26.12月時点 与那国町）

面積 28.95㎢

※面積はH25.10月末時点、国土地理院調べ

はじめに・・・

うみやまかわ新聞



利尻島のウニについて

利尻島の代表的な海の生き物のひとつ、ウニについて、「利尻町役場 ウニ種苗生産センター」に取材に行きました。

文：山本保平（仙法志小学校5年生）

取材した人：宮田秀彦さん
利尻町役場 ウニ種苗生産センター
栽培振興係長 主任

宮田秀彦（みやた・ひでひこ）さん
北海道利尻町出身。1968年（昭和43年）4月8日生まれ（46歳）。利尻高校卒業後、1993年（平成6年）6月より、利尻町ウニ種苗センター勤務。現在は栽培振興係長として、ウニの種苗・育成・放流を一手に担っている。新しい取り組みとしてナマコの養殖にも着手。

ウニ種苗生産センター（通称：ウニセンター）では、ウニを育てて海に放流する「養殖」をしています。ウニセンターは1980年（昭和55年）に始まりましたが、昭和から平成になり、海藻をたくさん採りすぎたせいで、ウニのかくれる場所がなくなり、さらにウニを採りすぎてしまったので、ウニが少なくなりました。そこでもっと放流する量を増やすために、1994年（平成6年）に今のウニセンターができました。放流する量は、昔のウニセンターに比べて約5倍になり、今年は400万個放流しました。しかし、簡単には増えないそうです。

ウニはナマコやヒトデと同じ棘皮動物の仲間で、五角形の口をもち、身の数も5個です。メスは卵を出す穴が5個あって、これはヒトデも同じです。オスとメスの形はほとんど同じなので、オスは白、メスはオレンジ色と身の色でオスとメスを見分けます。

養殖について宮田秀彦さんにお話を聞きました。まず赤ちゃんの時に直径1メートルくらいある水そうの中で育てられます。このひとつの水そうの中に、ウニの赤ちゃんが200万個いるそうです。ウニの赤ちゃんと言っても、まだウニの形はしていなくて、これから成長し、水そうのふちにくっついたらウニと呼ばれるようになります。水そうの温度は15度位が適温で、夏は暑く、冬は寒いので温度の調せつが大変だそうです。ある程度成長した後、特別なシートにウニの赤ちゃんを入れて、さらに大きい水そうに移し、2センチメートルくらいになったら海に放流します。ウニは暗い夜の間に沖に上がって来て、明るくなると海にもどって行くので、カラスなどは、まだウニが沖にいる間につかまえて食べます。また、ウニセンターは、ウニの養殖の他にも、一緒にウニのエサとなる藻を育てたり、ナマコの養殖やウニのエサとなるコンブを食べてしまうヒトデの駆除をしているそうです。

利尻島で採れるウニは2種類あって、1つはエゾバフンウニ、もう1つはキタムラサキウニと言い、利尻島ではエゾバフンウニのことをウニ、キタムラサキウニのことをノナと呼んでいます。ウニが利尻島の名産となっているのは、ウニセンターで働く人たちの努力のおかげでもあると思います。

海の遊び

利尻島の子どもたちが楽しむ海の遊びを紹介します！

文：志摩ななみ（沓形小学校5年生）／吉原美優美（沓形小学校5年生）
イラスト：吉原秀人（沓形小学校3年生）

利尻島の海遊びでよくやることは、イソガニ釣りです。波が高い時はできませんが、夏などにみんなで2時間くらいイソガニ釣りをして遊びます。イソガニは、岩の間や岩の下にいる小さいカニです。7月から8月くらいがよく釣れます。どうしてイソガニ釣りをするのかというと、釣れた時やみんなで釣ることが楽しいからです。

どのように釣るのかを説明します。まず、割りばしに糸をつけて糸の先にクリップをつけます。そしてエサ（ハム・タコ）をつけて釣ります。イソガニを釣るコツは、割りばしを持って上下にゆらすことです。特に岩の下や、岩と岩の間に割りばしを入れるとうまく釣れます。島内では、どんと岬の海岸がよく釣れます。昔はイソガニを釣って、すぐに焼いて食べていたそうですが、今はとったイソガニは、持ってかえって放っておくとくさくなるので、海に返しています。利尻の子どもたちがする海遊びは、他にも海水浴などがあります。海水浴は、身体全体が海に入れるので、暑い時にオススメです。波がおだやかなときは、遠くまで泳いで行けます。小さい子どもも浮き輪を使ったら楽しく遊べます。沼浦という海岸では砂があり、砂あそびなどができます。海の深さは遠浅なので、浮き輪などがなくても泳げます。

私たちはこのような遊びを色々な人に知ってもらい、遊んでもらいたいです。みなさんも一度、利尻島に来てイソガニ釣りや海遊びを体験してみてください。

イソガニ

イワガニ科
甲幅2.5センチメートル

主に日本の北海道・九州、韓国、台湾、中国北部に生息していて、海岸の岩しょうに多く見られます。オスのハサミの付け根にやわらかい毛があるのが特ちょうです。

利尻山の花と生き物

文：佐々木珠那（沓形小学校6年生）／菅原千尋（沓形小学校5年生）／榊ひより（沓形小学校3年生）
出典元：HTBまめぽん「利尻島」（西谷榮治）

利尻島は北海道の北部に浮かぶ島です。外周64キロメートルの利尻島の中央には、標高1721メートルの利尻山があります。この山には、黄色くて小さい花のリシリヒナゲシ、鮮やかな山吹色の花のボタンキンバイ、上向きで花を咲かせるリシリアザミなどの植物があり、短い夏の間に豊かに花を咲かせます。どれも利尻島だけに咲く花です。

他にも「オアオー、アーオアオ」と鳴くアオバト、口ばしが赤くて太いヤマショウビン、耳が大きい赤ネズミ、1日にたくさんの虫を食べるウサギコウモリ、歯が2つしかない土クジラなどの動物もいます。ここでは、このような利尻島ならではの植物や動物について紹介します。

利尻島の固有植物

ボタンキンバイ

ボタンキンバイはキンポウゲ科で、数あるキンバイソウの中でも、花びらに見えるがく片が9枚から15枚もあるのが、ボタンキンバイの特ちょうです。日本では、利尻山の8合目以上の草原に生育します。

リシリヒナゲシ

リシリヒナゲシは、日本に自生する唯一のケシ科ケシ属。利尻山山頂部の砂や小石がまざった土地に咲きます。高さ10センチメートルから、20センチメートル程度で、黄色いかわいい花を咲かせます。

リシリアザミ

リシリアザミはキク科アザミ属で、1998（平成10）年に新種のアザミの仲間として、発表されました。利尻島南部の海岸草原に生育し、上向きに花を咲かせます。開花時期は、種類の似ているチシマアザミよりも遅く開花します。

赤ネズミ

ネズミ科の赤ネズミは、主に夜間、地上で活動する夜行性の動物です。体長8～14センチメートルで、体重は20～60グラムあります。食べ物は、主に植物の種子や根、まれにこん虫などを食べます。尾長は、7～13センチメートルあります。

利尻島の動物

アオバト

ハト科のアオバトは群れで、海岸の決まった岩場に下り立ち、海水を飲みます。全長33センチメートルで、食べ物は、植物の種子や果実です。すんでいるかん境は森林で、「オアオー、アーオアオ」と鳴きます。

ウサギコウモリ

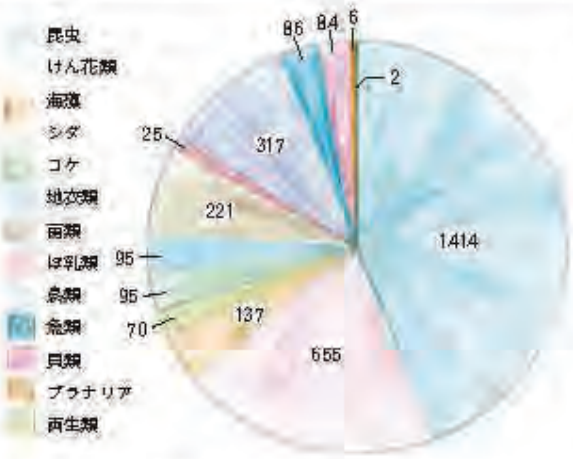
ヒナコウモリ科のウサギコウモリは、全長4・2～5・8センチメートル、体重5～10グラムで大きな耳が特ちょうのコウモリです。昼間の休み場所として主に木の後ろを使い、夜になると一晩で約500匹の虫を食べます。

土クジラ

土クジラは、アカボウクジラ科で最も大きく、口の先が木づちに似ているので、この名前があります。海の中に1時間以上も深くせん水することができます。食べ物は海底の魚です。体重は最大で12トンあります。

ヤマショウビン

カワセミ科のヤマショウビンは、ふわふわと波を描くように飛びます。特ちょうは頭部が黒く、腹以下はオレンジ色で、鳴き声は、「ピッピッ」「キッキッ」と短い声で鳴きます。ヤマショウビンを見られる時期は4月から5月とごくまれです。



文：佐々木珠那（沓形小学校6年生）
図版イラスト：榊ひより（沓形小学校3年生）
取材した人：佐藤雅彦さん　利尻町立博物館 学芸員

佐藤雅彦（さとう・まさひこ）さん
静岡県出身。1966年（昭和41年）3月7日生まれ（48歳）。北海道大学農学部農業生物学科動物学専攻卒。1990年4月より利尻町立博物館に勤務。現在は学芸係長として主に自然史を担当している。「利尻・礼文自然観察ガイド」「コウモリ識別ハンドブック」で執筆分担。

利尻島にいる生き物

利尻町立博物館で学芸員をしている佐藤雅彦さんに、利尻島にいる生き物について取材をしました。生き物の種類では、虫が1414種、きのこは221種、ほ乳類は25種、魚は86種、鳥は317種、プラナリアは6種がいることを教えてもらいました。他にも、きのこの写真や鳥の模型などがたくさんあり、利尻の生き物についてくわしく教えてもらうことができました。また、プラナリアという生物の説明では、利尻島にしかいないプラナリアがいることも分かりました。

島の自然と博物館

文：滝沢彩乃（沓形小学校6年生）
取材した人：西谷榮治さん　利尻町立博物館 学芸課長

私たちは、利尻町立博物館の学芸課長をされている西谷榮治さんに、利尻島にはネズミ対策に持ちこんだイタチが一番大きい動物で、熊などがいないことや、利尻の神様がヘビをきらいなので島内にヘビがいないという言い伝えがあることなど、島の自然についてお話を聞きました。1980年（昭和55年）5月11日にできた利尻町立博物館では、このような利尻島の歴史や自然に関係するものが展示されていて、島について、たくさんのことを知ることができます。

西谷榮治（にしや・えいじ）さん
北海道利尻町出身。1954年（昭和29年）11月8日生まれ（60歳）。1977年7月より利尻町教育委員会に勤務。1980年5月に開館した利尻町立博物館に学芸員として勤務。現在は学芸課長（教育課長）として主に歴史を担当している。著書「利尻の語り」、「利尻町史」通史編執筆分担。

自然の宝庫！利尻の沼と湿原

利尻島内にある、自然の宝庫といえる2つの沼。「姫沼」と「オタトマリ沼」を紹介します。

文：青山 礼（岩形小学校6年生）
出典元：「利尻礼文サロベツ国立公園（日本の自然）」（毎日新聞社／森田敏隆）
「利尻・知床を歩く（フルカラー特選ガイド）」（山と渓谷社／梅沢俊）

「鴛泊」という集落から約3キロメートルの所に、周囲1キロメートルの「姫沼」という、原生林に囲まれた、小さいけれども神秘的な沼があります。姫沼は、小さな沼をいくつもあわせた人工的な沼ですが、天気が良く、風がおだやかな日には、湖面に利尻富士が映る「逆さ富士」を見ることができます。

また、利尻島には、島の南部に「南浜湿原」という島内で最大の湿原があります。その周りには、観察用の木の道もあるので、散歩を楽しむことができます。また、湿性植物、高山植物の宝庫と言われており、学術的にも重要な湿原です。

利尻富士町という町に「鬼脇」という集落があります。鬼脇から、南へ約3キロメートル行った所に、「オタトマリ沼」という沼があります。オタトマリ沼は、利尻の中で最大の沼で、水深は3・5メートル、周囲1100メートル、沼の面積は約0・03平方キロメートルです。また、オタトマリ沼は島内で最も自然かん境に恵まれた地域で、冬にはたくさんのわたり鳥がやって来る野鳥の宝庫です。オタトマリ沼の近くにあるおみやげ屋さんでは、万年雪アイスや熊笹アイスなど、利尻山の万年雪を利用して作られたアイスを販売しています。

＼利尻3大マスコット!!／

利尻島には利尻町・利尻富士町と、2つの町があり、それぞれにマスコットキャラクターがいます。
今回は、そのキャラクターのプロフィールを紹介します。

文：菅原花菜美・榊 日陽（岩形小学校5年生）

りしりん

出身地：利尻町
生年月日：2011年
身長：利尻昆布（3等）2枚分
体重：ウニ200個分
友達：利尻富士町のりっぷくん・りっぷちゃん、礼文島のあつもん
特徴：体は利尻昆布の形で、頭の所には、利尻の山に生えているリシリヒナゲシ、お尻の辺りには利尻山の絵が書いてあります。

りっぷくん

出身地：利尻山鴛泊（おしどまり）コース4合目付近
生年月日：9月30日
身長：ウニ2個分
体重：ウニの身100個分
友達：利尻島に住んでいる皆さん
特徴：大きなしっぽとふっくらしたお腹

りっぷちゃん

出身地：利尻山鴛泊（おしどまり）コース4合目付近
生年月日：10月1日（りっぷくんと1日違い！）
身長：リシリヒナゲシと同じくらい
体重：ヒミツ
友達：利尻島に住んでいる皆さん
特徴：大きなしっぽとふっくらしたお腹

今回紹介した
利尻島のマスコットキャラクターは、
島の内外で色々な活動をしています。
会いたい人は、フェリーで利尻島に来ると
フェリーターミナルで会えるかも！
ぜひ来てくださいね！

山クイズ　海クイズ

文・イラスト：青山 礼（岩形小学校6年生）／宗庄海蘭（岩形小学校3年生）／志麻美太（岩形小学校3年生）／山木陸太（仙法志小学校2年生）

1.利尻にしかない花は何種類あるでしょうか

2.「利尻」の意味は何でしょうか

3.「ポン山」の意味は何でしょうか

1.ウニの種類は何種類でしょうか

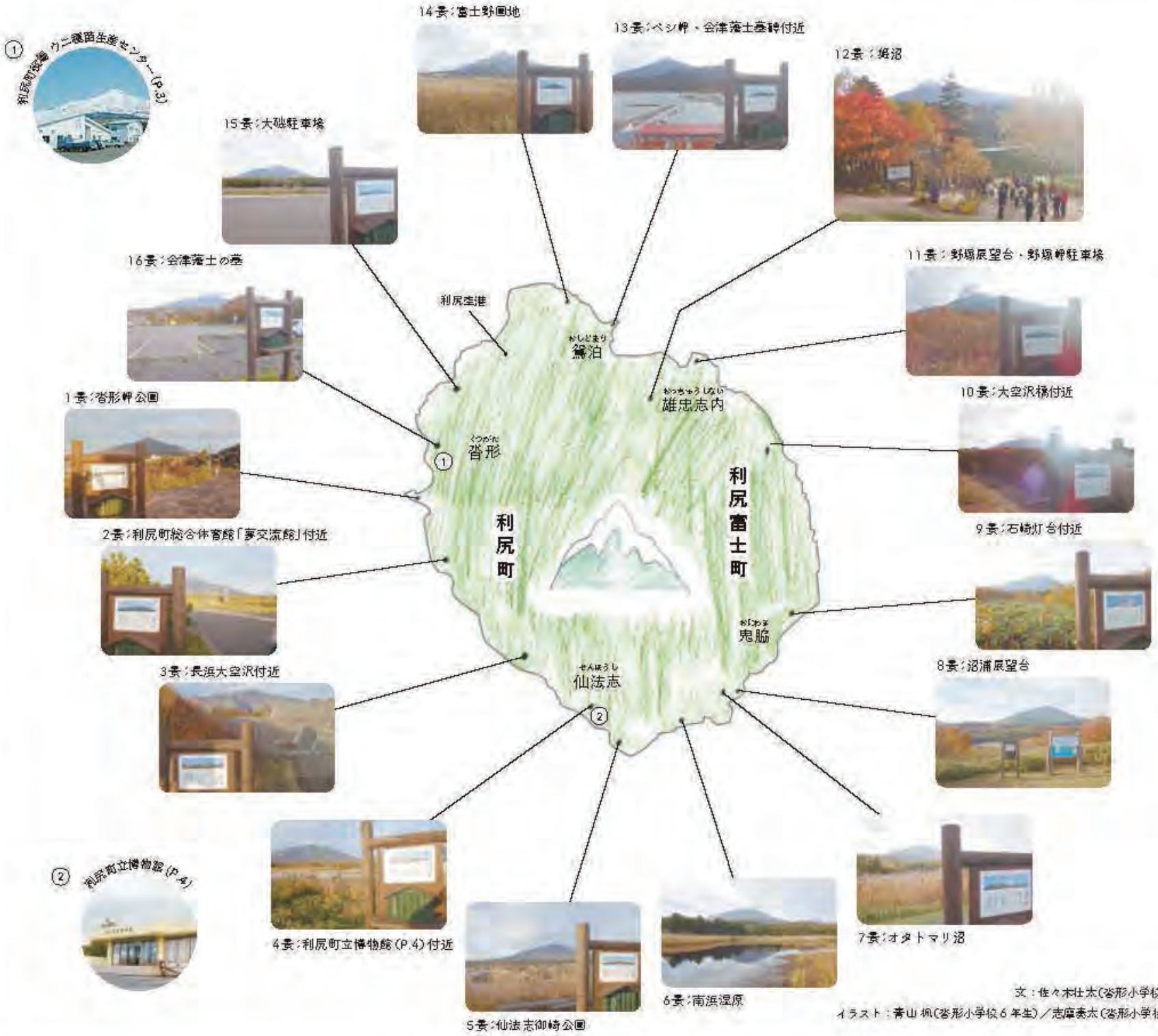
2.昆布に裏・表はあるでしょうか

3.磯（いそ）の岩と岩の間にいる生物は何でしょうか

※答えは6P下段

利尻の地図紹介

利尻島には標高1,721メートルの利尻山があります。島内には、それぞれちがった角度から利尻山をながめることができる「利尻山16景」というポイントが、16ヵ所あります。利尻島内を1周できる道路は約50キロメートルなので、1時間位で16ヵ所を回ることができます。この16景をより楽しむために、「利尻山16景スタンプラリー」にチャレンジしてみましょう！初めての人はスタンプ台のある看板を見つけるのが、少し難しいかもしれませんが、地図を片手に利尻の美しい景色を楽しんでください！



文：佐々木壮太（鴛形小学校６年生）
イラスト：青山 楓（鴛形小学校６年生）／志摩麦太（鴛形小学校３年生）

編集後記

青山 楓（あおやま・かえで）／利尻町立鴛形小学校６年生
この新聞を通じて、利尻の自然について深く考えることができました。

滝沢彩乃（たきざわ・あやの）／利尻町立鴛形小学校６年生
うみやまかわ新聞を読んだ人が、利尻に来てみたいと思って欲しいです。

山本康平（やまもと・こうへい）／利尻町立仙法志小学校６年生
みんなの意見をまとめるのは大変だったけれど、とても楽しかったです。

佐々木壮太（ささき・そうた）／利尻町立鴛形小学校６年生
新聞作りを通じて、利尻島は本当に自然が豊かだと思いました。

【利尻町立鴛形小学校】６年生 長谷川琴音（はせがわ・ことね）／佐々木珠那（ささき・じゅな）／５年生加藤ゆうか（かとう・ゆうか）／志摩ななみ（しま・ななみ）／菅原千聖（すがわら・ちさと）／長谷川貴穂（はせがわ・かほ）／菅原美菜美（すがわら・みなみ）／菅原花菜美（すがわら・かなみ）／榊日陽（さかき・ひなた）／４年生 滝沢雪乃（たきざわ・ゆきの）／３年生 菅原秀人（すがわら・しゅうと）／榊ひより（さかき・ひより）／志摩麦太（しま・かなた）／京彦海蘭（あびこ・みらん）／２年生 滝沢咲乃（たきざわ・さきの）／【利尻町立仙法志小学校】２年生 山本陽太（やまもと・ようた）

地域コーディネーター
高橋哲也（たかはし・てつや）

協力
関根智敏（せきね・ちとし）／利尻町教育委員会 社会教育係長・主事

答え

1. ３種類
（リシリヒナゲシ・リシリアザミ・ボタンキンバイ）

1. ２種類
（エゾバフンウニとキタムラサキウニ）

2. アイヌの人々が、「リイシリ（高い島）」という風に呼んでいたことから、「利尻」と名付けられました。

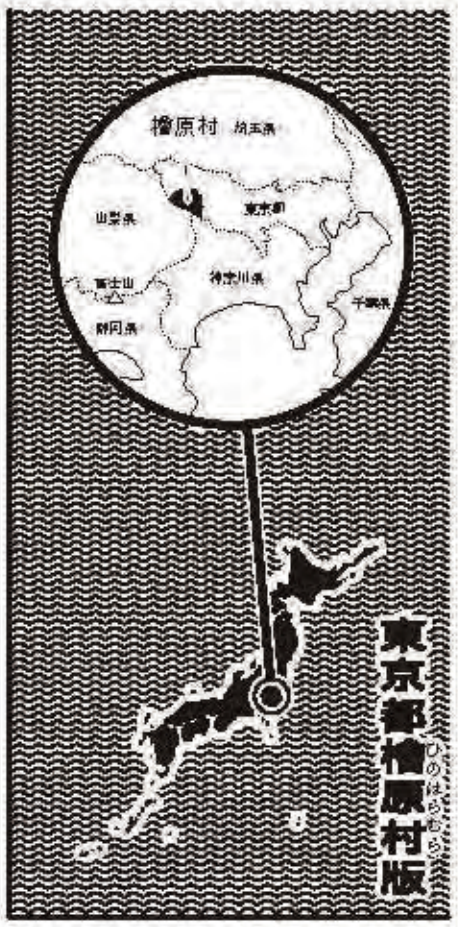
2. ある（裏は凹型・表は凸型）

3.「ポン山」はアイヌ語で、「小さい（ポン）山」という意味です。

3. 小さい「イソガニ」

文・イラスト：青山 楓（鴛形小学校６年生）／京彦海蘭（鴛形小学校３年生）／志摩麦太（鴛形小学校３年生）／山本陽太（仙法志小学校２年生）

うみやまかわ新聞



檜原村お祭り紹介

檜原村のお祭りは、今から400～500年前に始まったとされています。
その内容は集落によって、少しずつちがいます。それぞれの集落に伝わるお祭りを紹介します。

文：大谷杏子（檜原学園檜原小学校6年生）／大谷健介（檜原学園檜原小学校6年生）

檜原村には全部で17の集落があり、それぞれにお祭りがあります。各集落のお祭りには意味があって、檜原村郷土資料館の館長をしている清水正治さんによると「豊作や家内安全・商売繁盛を願って始まった」そうです。檜原村は、9～10月の間にほとんどの集落がお祭りをしているので、日にちが重なってしまうことがよくあります。しかし、5年に1度開かれる檜原村郷土芸能祭では、全集落のお祭りを見ることができます。檜原村郷土芸能祭は、とてもにぎやかで楽しいです。そんな檜原村のお祭りは全部で4種類。式三番・はやし・神代神楽・獅子舞です。それぞれを紹介します。

【式三番】

式三番とは、檜原村の小沢地区と笹野地区で行われていて、太鼓・鼓・笛を使う能です。役は全部で12役。その中でも、舞いがあるのは、翁・尉・千歳・大鼓です。昔は長男で独身の人しかできませんでしたが、今は人が少なくなって次男でも参加しています。演目は全部で4つあり、翁の舞・千歳の舞・尉の舞・すずの舞です。式三番では、天下泰平・五穀豊穣・疫病払い・家内安全が祈願されています。翁の衣装には1770年（明和7年）の文字があり、古くから続いていることが分かります。

【はやし】

はやしは、笛・大太鼓・小太鼓・かねを使い、その音色に合わせて、ひょっとこやきつね・おかめの面をつけた人がおどります。全部の楽器にはそれぞれ楽譜のようなものがあり、演奏し、みんなで合わせることで1つの曲になります。参加する人に制限はなく、みんなで楽しくおどったり、楽器をたたいたりします。

【神代神楽】

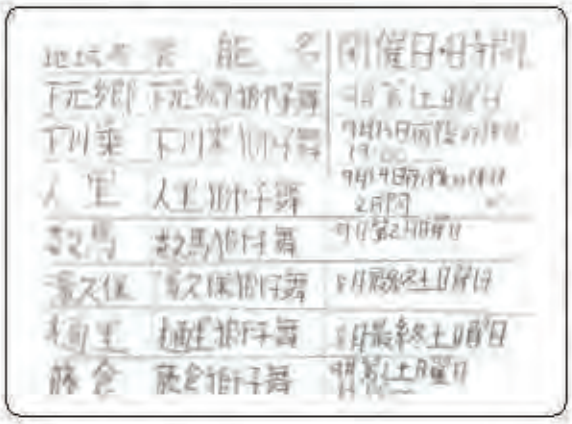
神代神楽とは、笛と太鼓を使った能で、家内安全・五穀豊穣・疫病払いを祈願し、相互慰安も兼ねて上演されています。上演前には「六根清浄」のかけ声とともに式三番同様、川で身体を清めるみそぎを行います。演目は全部で12個あり、古くから「柏木野の12神楽」と呼ばれています。創始年代は不明ですが、地方色豊かな神楽として注目されています。

檜原村の獅子舞紹介

檜原村の獅子舞について、その特ちょうや歴史、獅子舞を作る時の材料など、紹介します。

檜原村の獅子舞は、村の7つの地域で行われています。そのすべての内容が、各集落で少しずつちがっていますが、基本となる流れは、どの集落も同じです。獅子舞は、ほとんどが夏の終わりから秋の初めにかけて行われています。場所は、まず神社の前で一度おどり、そのあとお酒でお清めをしてから、それぞれの集落にあるコミュニティセンターや自治会館でおどっています。獅子舞のおどりは、いくつかの曲目からできていて、その曲目を1タチ・2タチと数えます。檜原村のほとんどの地域の獅子舞は、12タチでできていますが、最後までおどりません。最後の12タチまでおどると、不幸が訪れると言われているからです。また、獅子舞をおどることができるのは男の人だけですが、演目によっては、宝来という役目がいないとおどれない演目もあります。宝来は大頭・中獅子（女獅子）・小頭（弟獅子）の先生にあたり、男獅子2匹、女獅子1匹で行われます。

獅子舞を作る木は、桐の木（たんすなどを作る木）や桂の木を使います。また檜原村の獅子舞の始まりは、300年から400年前と言われています。今から300年前は江戸時代です。獅子舞について調べた結果、自分が暮らしている地域について、これまで知らなかったことを学ぶことができました。



檜原緑の仕事

たくさんの森や山に囲まれた檜原村には、
この村ならではの仕事がたくさんあります。
ここでは、宮大工・猟師・林業をされている方々に、
その仕事についてQ&A方式でうかがいました！

文・イラスト：高木 恵（檜原学園檜原小学校6年生）

宮大工

福田 元（ふくだ・はじめ）さん
東京都檜原村出身。1947年（昭和22年）4月12日生まれ（67歳）。福田工務店代表。中学卒業後すぐに大工の道へ。宮大工歴51年。

檜原村の山の木を使って、
お寺などを建てる宮大工。
その仕事とはどんな内容なのでしょうか。
檜原村で51年間、宮大工をされている
福田 元さんにうかがいました。

Q1 宮大工とはどんな仕事ですか？

主に寺社仏閣などを建てる仕事です。具体的な仕事の流れは、まず図面を書いて、それを見ながら土台を造ります。その後、木材をきざみ、建前をします。建前は、建物を本格的に組み立て始める日に、建物が無事であるように願って行われる儀式です。そして、下から順に組み立てていきます。宮大工が使う道具は全部で16個くらいあるのですが、なかでも、炭つぼとさし金が大切です。炭つぼは、組み立てる木がくさらないように、炭を木につけるのですが、その炭を入れておくつぼです。さし金は、木材の寸法などを簡単に測ることのできる直角型の定規です。

Q2 宮大工の仕事をしていて楽しいと思うのは、どんな時ですか？

もちろん建物が完成した時です。特に作業が難しかったり、大変だった時は、すごくうれしいですね。

Q3 森や山に囲まれた檜原村のいいところは、どんなところですか？

木がたくさんあるので、建物に適した木材を選んで使うことができる点が、宮大工としては、とてもいいところだと思います。

猟師

小林 貴（こばやし・たかし）さん
1942年（昭和17年）2月2日生まれ（72歳）。檜原村猟友会副会長。木樵は大工ながら、30歳の時に本格的に猟を始めた。猟師歴42年。

自然に恵まれた檜原村には、イノシシやシカ、
タヌキなど、多種多様な動物が生息しています。
そんな動物たちから畑を守ったりしている
檜原村猟友会・副会長の
小林 貴さんにうかがいました。

Q1 猟師とはどんな仕事ですか？

猟師は、イノシシやシカなどの動物が畑や民家を荒らしたりするので、そういったことを防ぐために、動物つかまえたり駆除をする仕事です。

Q2 猟師の仕事をしていて楽しいと思うのは、どんな時ですか？

狙った獲物に命中して地面に転がる時と、大きい獲物を狙う大物狩りでは、グループを作って狩りをするのだけれど、どうやってしとめるかをみんなで話し合っている時が楽しいですね。

Q3 森や山に囲まれた檜原村のいいところは、どんなところですか？

父親がずっと猟師をやっていたので、子どもの頃からうさぎや鳥を狩っていましたが、檜原村の山道はとても険しく、今も変わらず、歩くのがとても大変。だからこそ、狩りをする楽しさや達成感もあるのだと思います。そういった意味で、この檜原村は猟師にとって、いいところだと思います。

林業

田中惣次（たなか・そうじ）さん
東京都檜原村出身。1951年（昭和26年）3月4日生まれ（63歳）。田中林業株式会社会長。日本大学林学科卒。江戸初期から続く林家の14代目。

江戸時代初期から檜原村で林業を行っている
田中林業株式会社。
その14代目となる田中惣次さんに、
どんな仕事なのか、
檜原村の林業についてなどをうかがいました。

Q1 林業とはどんな仕事ですか？

一から木を育てて、木の生長を助けながら、ばっ採までのすべてを行う仕事です。

Q2 林業の仕事をしていて楽しいと思うのは、どんな時ですか？

木が大きく育っていくことが楽しいですね。特に、30年から50年くらいかけて大きくなると、とてもうれしく思います。

Q3 森や山に囲まれた檜原村のいいところは、どんなところですか？

自然が豊かで、たくさんの木々が育つかん境だけれど、一方で都会にも近いので、大勢の人が訪れることができます。そして、檜原村の森や山と、たくさんの人がふれあうことができるので、そういったところがいいなあと思います。

村長に聞きました！

檜原村の村長・坂本義次さんに、
村長の仕事や檜原村のことについて
お話をうかがいました。

文：大谷 春斗（檜原学園檜原小学校6年生）

「檜原村の村長は、村民のみんなが快適に生活できるようにするのが仕事です」と坂本村長は言いました。例えば、図書館を建てたり、学校の壁を木にしたり、村唯一の診療所の運営や台風・大雪で大変な時などに食べ物を配ったり。東京都檜原都民の森の管理や温泉の運営、村のみんなが使うバスの定期代を負担してくれるなど、村がそこに住む人たちのためにしなければいけないことを、考え、決めてくれています。村には山の中にモノレールがあります。それは、車が通れないような山の高いところに住んでいる人たちが、大きな荷物を運ぶなど、楽に移動するために使われています。昔はモノレールがなく、2～3キロメートルを重たい荷物を持って歩かなければいけませんでした。そこで、村のみんながもっと楽に行き来できるように、坂本村長が村の北（藤倉地区）に4本と南に1本モノレールをひき、村の中に合計5本のモノレールができました。「檜原村の魅力を一言で言えば、私の名刺にも書いてありますが、『みどりせせらぎ風の音』ということです。檜原村のキャッチコピーですが、これが村の魅力を最もよく表しています。村長の仕事は、その魅力を守り、もっとよくすることなのです」と坂本村長は話します。そんな坂本村長は、趣味でオカリナを吹きます。60歳からオカリナを始めたそうで、そのきっかけは、檜原村の保育園のクリスマス会に招待され、そこで園児たちと一緒に音楽を楽しむためでした。

今までに購入したオカリナは全部で16個もあるそうです。中には珍しい「トリプルオカリナ」も持っています。坂本村長は、自然に囲まれた檜原村の魅力や、ここで暮らす、みんなのことを大切に考え、村長の仕事をしています。

坂本義次（さかもと・よしじ）さん
東京都檜原村出身。1945年（昭和20年）2月28日生まれ（70歳）。大学卒業後、檜原村消防団長、檜原村行政改革推進会会長などを経て、1999年（平成11年）から檜原村村議会議員、その後、2003年（平成15年）5月より檜原村村長。

檜原村の食べ物紹介

檜原村は、自然豊かな場所なので、
特産のおいしいジャガイモやゆずなど、
いろいろな食材があります。
ここでは、そんな檜原村の食べ物を紹介します。

文・イラスト：谷合莉奈（檜原学園檜原小学校6年生）

檜原村の主な特産品の1つはじゃがいもです。檜原村は、山間部にある村なのでしゃ面が多く、水はけの良い土地がたくさんあります。そのため、さっぱり、味わい深いじゃがいもができるそうです。このじゃがいもを使った「じゃがいもアイス」や「じゃがいも焼ちゅう」、「じゃがバーガー」などたくさんの商品があります。どれもとてもおいしいです。

檜原村のじゃがいもは、「おいねのつるいも」と呼ばれています。これは昔、檜原村にとついで来たおいねさんという人が、山梨からもって来た芋を植え、育てたことから、「おいねの」という名前が付いたそうです。

他にも檜原村で有名なのは、こんにゃくです。こんにゃくを作る工場もあります。こんにゃくの作り方は、まず、こんにゃく玉を洗って皮をむきます。なべに水5～6リットルを入れて、かき回しながらすりおろします。そして火にかけ、ふっとうしてから中火で、20～30分混ぜながら煮ます。色がすき通ってきたら火を止め、熱湯でといたソーダを入れ、素早く混ぜます。ねっとりしてきたら、こんにゃくを型に移します。固まったら水をかけ、型からはずし、もう一度なべで20～30分ゆでます。そしてこんにゃくを切り、水にさらして完成です。

このこんにゃくを使って、細く切ったこんにゃくをしょう油で食べる「刺身こんにゃく」や、しらたきのような「こんにゃくそうめん」などの商品があります。こんにゃくはコレステロールも低く、とっても健康にいいので、ぜひ食べてください！

じゃがいも・こんにゃくとともに、檜原村の畑でよく見るのが、ゆずの木です。檜原村はしゃ面が多い地形ですが、ゆずはそういった場所でも元気に育つそうです。檜原村のゆずは、上品なすっぱさがあり、とってもおいしいです。じゃがいもやこんにゃくと同じく、ゆずも商品が作られています。それは「ゆずワイン」です。ゆずのほのかなあまみが人気の商品。でも生産量が少ないため、檜原村限定なので、ぜひ檜原村に来て飲んでみてください。

檜原村は、自然豊かな場所なので、たくさんの種類の山菜があります。
どんな山菜が採れるのか、観光協会などでリサーチをしました。

よく採れる山菜は、ウド、ワラビ、フキ、たらの芽やふきのとう、ゼンマイなどです。山菜ではありませんが、のらぼう菜もよく採れるそうです。檜原村では、ふきは煮付けや、キャラブキなどにし、ウドは天ぷらやごま和えなどで食べます。ワラビはアクぬきをした後、おひたしや煮物にします。私は、檜原村の特産であるじゃがいもとワラビのみそしるが、とてもおいしいです。山菜は、四方を山に囲まれている檜原村ならではの味覚です。

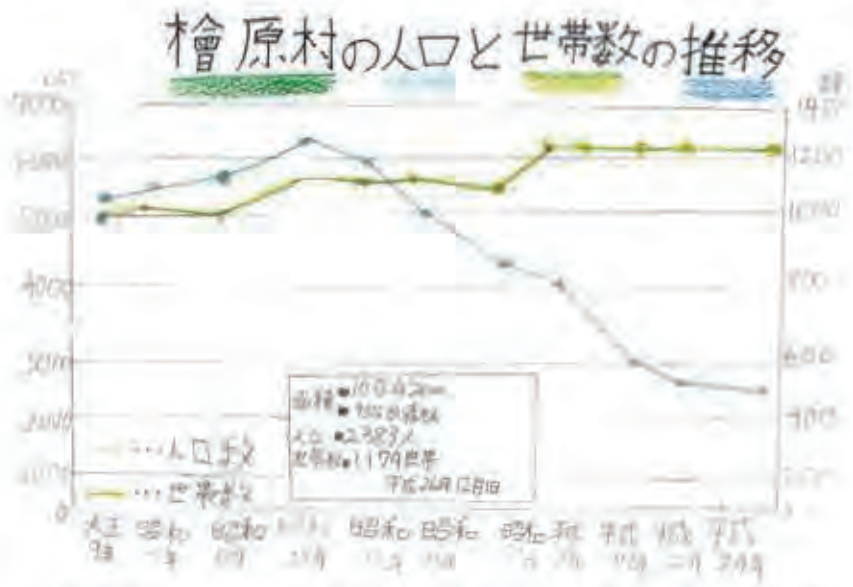
檜原村の川の水は、とてもきれいなので、たくさんの生き物が住んでいます。
その中でも川魚を紹介します。

檜原村の川に生息している魚は、主には8種類で、ヤマメ、カジカ、アユ、イワナ、ウナギ、ハヤ、ウグイ、ニジマスがいます。ニジマスは点々模様で、光が反射するとにじ色にかがやいて見える魚です。カジカは、こげ茶色で体全体に点々模様のある魚です。アユは銀色で、エラの辺りに黄色いすじがある魚です。ハヤは、体の上部が黄土色で、下部が銀色の魚です。魚だけでなくサワガニ、メダカ、オタマジャクシなどもたくさんいます。

文・イラスト：吉沢悠（檜原学園檜原小学校6年生）

檜原村名所マップ

檜原村の山々は、季節に合わせてさまざまな姿になります。
春は、点々と桜があり、夏は緑が生いしげる山になります。
秋は、茶色や赤色がきれいな紅葉になります。
冬は葉が落ち、山そのものの姿を見ることができます。
そんな檜原村には、
「みどり　せせらぎ　風の音」というキャッチコピーがついていて、
それぞれの言葉に意味があり、
「みどり」が山々、「せせらぎ」が秋川渓谷、
「風の音」が山と秋川渓谷の間をふきぬける風を表しています。
このキャッチコピーの通り、自然が豊かなので、
春から冬の初めまで、ハイキングが楽しめます。
檜原村に来る人の多くが、ハイキングを目的にやってきます。
檜原村の名所を紹介します！



人口：2,383人
（男性：1194人／女性：1189人）
世帯数：1,174世帯
面積：105.42平方キロメートル

周囲を標高約800～1500メートルの山々に囲まれ、総面積の93％が林野で、平たん地が少なく、村の大半が秩父多摩甲斐（ちちぶたまかい）国立公園にふくまれています。東京都心から約50キロメートルはなれた東京都の西に位置しています。

出典元：東京都統計データベースウェブサイトより
データは、2014年12月1日現在のもの

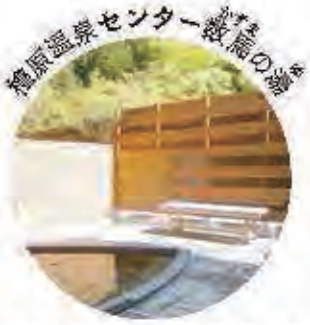
檜原都民の森は、山を使ったアスレチックなどがあり、木工教室でイスなどの家具を作ることができます。標高1,000～1,500メートルの高地にある山岳公園です。

小林家住宅は、国指定重要文化財です。村で一番古い民家と言われています。18世紀前半に建築されたと考えられているそうです。

神戸岩は、高さ約100メートル・谷底の幅約4メートル・長さ60メートルの渓谷です。チャート（火打ち石）層という岩質で、とても固い岩でできています。

大蛇が住むと言い伝えのある払沢の滝。滝つぼがとても美しく、日本の滝百選にも選ばれています。全長は、およそ60メートルになります。

魚とりなど、川遊びもできるバーベキュー場です。渓谷を一望できるので、川や山の景色がとてもきれいです。



檜原村の村営温泉施設です。村の山でぱっ採したまきで、お湯をわかしているそうです。温泉につかりながら、檜原村の風景を見ることができます。

人里集落にある五社神社。本殿には、平安時代に造られたとされる6体の御神体が安置されています。6体すべてが非公開になっています。

ちとせ屋は、檜原村の源流水を使っているとうふ屋さんです。とうふ以外にもアイスクリームやおからドーナツなども作っています。

文・イラスト：小林絵美（檜原学園檜原小学校6年生）

編集後記

大谷杏子（おおたに・きょうこ）
檜原学園檜原小学校6年生
この新聞で、檜原村っていいところだなーと感じてもらいたいです。

大谷健介（おおたに・けんすけ）
檜原学園檜原小学校6年生
テレビ電話会議で遠く離れた人と話すことがおもしろかったです。

谷合莉奈（たにあい・りな）
檜原学園檜原小学校6年生
記事を書くのがとても難しかったけれど、みんなで取り組めてよかったです。

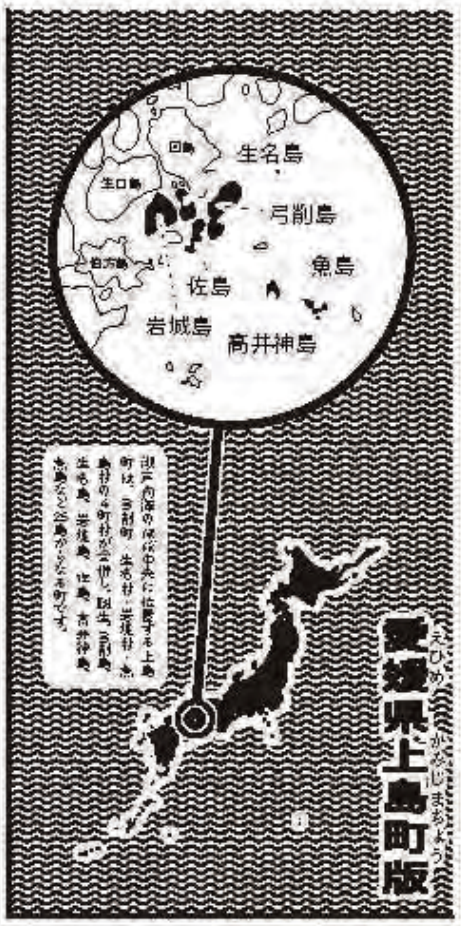
吉沢悠（よしざわ・はるか）
檜原学園檜原小学校6年生
取材や授業がとても楽しかった。新聞を作る作業は大変なのだと感じました。

杉田拳斗（すぎた・けんと）
檜原学園檜原小学校6年生
村長へのインタビューは緊張したけれど、檜原村について話を聞けて楽しかった。

高木蒼（たかぎ・あおい）
檜原学園檜原小学校6年生
檜原村の林業や宮大工の仕事について話が聞けてよかったです。

地域コーディネーター
鈴木健太郎（すずき・けんたろう）

うみやまかわ新聞



日本を支える船と船乗りの仕事はスゴイ！

島から世界へ

文：村上宏樹（上島町立三島小学校6年生）／赤近ゆと（上島町立三島中学校2年生）

私たちの暮らす上島町には、船を造る造船所、そして船乗りを育てる商船学校があり、多くの人が船に関わる仕事をしています。海に囲まれた島国＋日本。実は私たちの暮らしには船が大切な役割を果たしています。そんな船に関わるお仕事をされている方、4名にお話をうかがいました。

世界で活躍する人を育てる先生たち

弓削島にある国立弓削商船高等専門学校は、全国に5校しかない船乗りを育てる高等専門学校です。1901年（明治34年）に島の発展を目指して開校し、世界中で活躍する優秀な船乗りさんを育ててきました。

商船学科教授の多田光男先生は、愛媛県西条市出身で、弓削商船を卒業後、先生として学校に残り、安全に航海するために必要な知識を学生に教えています。先生をしていて大変なことは、学生たちの個性や成長の度合いが、人それぞれちがうので、一人ひとりに合わせた指導をすることだそうです。でも、若い人たちと接する時間が楽しいのだと、にこやかに言いました。

弓削商船には、商船学科の他、新しくできた電子機械工学科と情報工学科があります。他の学科ができたことで、先生と学生の幅が広がって、多様性が出てきたと話していました。全国に5校しかない船乗りを育てる学校なので、これからもいろいろな所で活躍する人を育てて欲しいと思いました。

世界へはばたけ！弓削商船生

国立弓削商船高等専門学校商船学科を卒業し、現在専攻科1年生の五井和貴さんは神戸出身。子どものころから船や海が好きだったという五井さんは、中学校3年生の時にたまたま弓削商船のことを知り、「船乗り」の仕事にロマンを感じ、入学したそうです。弓削商船に入って良かったことは、専門的な勉強ができたことと、協調性をはじめとする「シーマンシップ」が身についたこと。寮生活や航海実習などを通じて、人として成長したとも言っていました。

商船学科では、5年生の後期から1年間、実習船で日本中を回る航海実習があります。国内だけではなく、1ヵ月間陸に寄らずにハワイまで行く遠洋実習もあるそうです。帆船「日本丸」での実習では、出航時に高さ50メートルもあるマストに命づなしでのぼり、「ごきげんよう」と言って、見送りにきてくれた人たちに感謝を示すのだと聞いてびっくりしました。五井さんの将来の夢は、外航船の船員になることだそうです。これからの活躍が楽しみです！

多田光男（ただ・みつお）さん
愛媛県西条市出身。1957年（昭和32年）11月1日生まれ（57歳）。独立行政法人国立高等専門学校機構 弓削商船高等専門学校 商船学科教授 教務主事。弓削商船高等専門学校7期卒業。

五井和貴（こい・かずき）さん
兵庫県神戸市出身。1993年（平成5年）4月22日生まれ（21歳）。今がんばっていることは、海技士などの資格を取ることと英語の勉強。学校では美術部に所属し、コンクールで賞をもらうほど絵も上手。

（七）木田 裕（きだ・ゆたか）さん
岩城造船株式会社 業務取締役工場長／（七）米本憲司（よねもと・けんじ）さん 岩城造船株式会社 取締役業務グループ長

菊本洋迪（きくもと・ひろみち）さん
愛媛県上島町三島出身。1939年（昭和14年）11月10日生まれ（75歳）。元船乗り。商船学校など学校で資格を取り、船長になる人が多いなか、独学で勉強し船長になったという努力家。

私たちの暮らしのために働く船乗りさん!!

菊本洋迪さんは、高校卒業後18歳で船乗りになりました。独学で勉強し、資格を取って船長にまでなり、定年。その後、造船所で10年間ドックマスター（※1）としても活躍しました。船乗り時代は、貨物船、輸送船、穀物船など、荷物を運ぶ仕事をされていました。例えば、日本からは、家電製品や衣類などを輸出し、北米からは小麦や大豆を輸入していたそうです。船乗りの仕事は、10ヵ月働いて、2ヵ月お休みという普通とはちがうサイクルの働き方です。大変に思えますが、18歳から船上生活をしていた菊本さんにとっては、それが当たり前のことで不便とは感じなかったのだそうです。しかし、船乗りは命がけの仕事で、遭難したり、時には強盗にあうこともあると言います。

日本の貿易量のうち99・7％は船が運んでいます。（※2）船乗りさんが苦労してさまざまな荷物や資源を運んでくれるおかげで、私たちの暮らしは成り立っています。そんなかっこいい船乗りさんが弓削島にはたくさんいるのです。

※1ドックマスター：修理のために造船所にやってくる船の運転をしたり、新しくできた船の試運転などをする造船所の船長さん。朝の流れなど、地元の海に詳しくないとできない仕事です。
※2日本海運の現状（発行：一般社団法人日本船主協会／2014年10月）より

日本のものづくりを支える誇り高き造船職人

岩城島には、4つの造船関連工場があります。その1つ、岩城造船株式会社は、1971年（昭和46年）に岩城島に設立された造船メーカーで、毎日約600人の人が働き、年間10隻以上の船を造っています。

船造りのこだわりをたずねると、業務グループ長の米本憲司さんは、「日本製のプライド」として、見えない所まで手を抜かないものづくりだと、生き生きとした表情で教えてくれました。船は注文が入ってから設計が始まります。たった一枚の鉄板から、多くの人の手によって大きな船が造られます。工場長の木田裕さんは、完成した船にはそれぞれ思い入れがあり、船主さんに受け渡す時には毎回感動すると言います。また、遠く海外で自分たちが造った船に再会することもあるそうで、その時は誇らしく感じると言いました。

日本の造船所で造られる船は、職人さんの技術とプライドによって、世界で高い評価を得ているそうです。そんな職人さんたちが、私たちの島にいることを誇りに思います。

NPO法人ゆげ・夢ランドの会のみなさん

海をきれいにするのに役立つ微生物「EM」

文：村上愛菜（上島町立弓削小学校6年生）

私たちが住む愛媛県上島町では、EM菌を活用して海をきれいにする活動が盛んに行われています。
町内の小中学生も、学校ぐるみで活動に参加しています。
活動の中心を担っている「NPO法人ゆげ・夢ランドの会」のみなさんにお話をうかがいました。

EM（イーエム）という言葉を聞いたことがありますか。私たちの島では、ほとんどの人が知っているくらい有名です。EMとは、有用微生物群（Effective Microorganisms）の略で、かん境にも人間にも役立つ微生物たちのことです。光合成細菌や乳酸菌、こう母菌などがふくまれ、畑の土を良くしたり、海をきれいにしたり、そうじや洗たくなどにも利用することができます。

私が通う弓削小学校では、毎月1回、EM団子を作る日があります。EM団子は、EMと土を混ぜて団子状にし、発こうさせたものです。できたものは、別の日に小学校の前の海に投入します。活動を指導しているのは、「NPO法人ゆげ・夢ランドの会」（以下、「夢ランドの会」）のみなさんです。「夢ランドの会」は、EM菌などを活用して島のかん境を良くするために、2005年（平成17年）に設立された会です。EM活性液や団子を作り、海へ投入したり、EM活性液を畑や家のそうじに使ってもらうために活動を行っています。現在は15名のメンバーを中心に、約300名の会員、婦人会、学校とも連けいしています。

活動は、海のヘドロ対策として、2003年（平成15年）に下弓削地区で始まりました。当時、家庭の生活はい水が海に流され、海がよごれていたので、地区で清そう活動を行っていたそうです。そんな時、近くの大三島でEMの活動をしている人がいると知り、作り方を教えてもらって、弓削島でも海の浄化に利用することになりました。会のみなさんの熱心な活動のおかげで、今、弓削島の海にはヘドロもほとんどなく、水もきれいになりました。

「夢ランドの会」の濱村壽さんと小澤宏次さんに活動をしていて大変だったことを聞くと、「すべてが大変」と笑いました。活動に参加する若い人がいないこと、資金面、地域の理解不足など、大変なことはたくさんあるそうです。

けれども、2人は海や自然が大好きで、ハクセンシオマネキというカニや、アマモという海そうの群生など、海がよごれていたときは見られなかった生き物が見られるようになり、海がきれいになっていく様子を見ることができてうれしいと話し、また、活動を続けるうちに、地域の人たちの海に対する意識も変わってきたと言います。子どもたちがEM団子の投入に加え、浜辺のゴミ拾いをしてくれたり、海をよごさないという意識を持つようになってきたそうです。

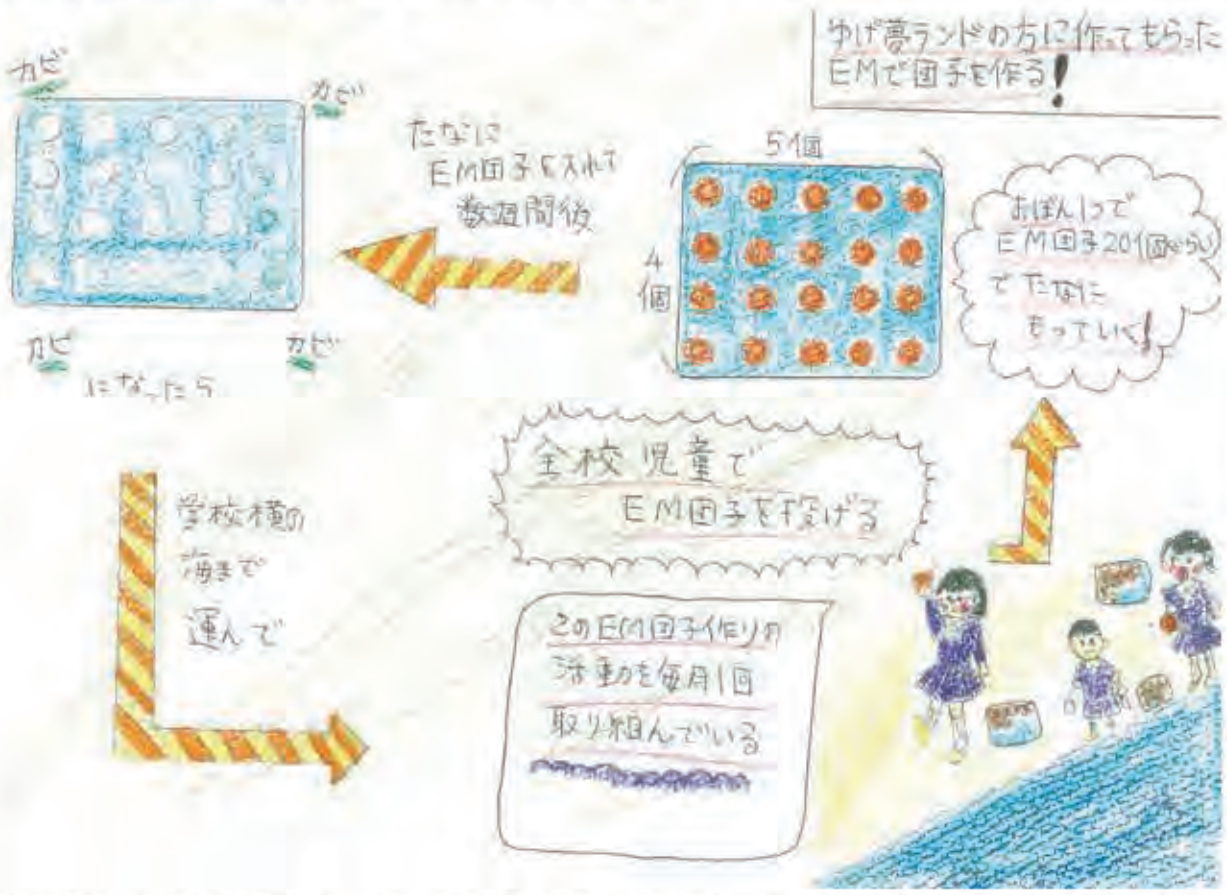
「夢ランドの会」の「夢」の1つは、浜にアサリが戻ってくること。濱村さんや小澤さんが子どものときには、夕方にアサリを採りに行き、朝、みそ汁にして食べることが普通だったそうです。かん境の変化でアサリはいなくなり、残念ながら、今もなかなかもどってきてはくれません。でも2人は、「アサリがもどってこなくても、子どもたちが海、そして島を好きになってくれたら、そこに意味がある」と言います。弓削島の海には、おいしい魚、貝、海そうなどの海の幸がたくさんあります。「おいしいところだけいただいたら申し訳ない。海をきれいにして返すのは当たり前のこと」と、話しました。

EMは、海をきれいにするだけではなく、畑やにおい対策にも役に立つので、これからも、「夢ランドの会」の方々にがんばってもらい、私たちもお手伝いしていきたいです。

EMと土を混ぜて団子状にします

EM団子作りをする弓削小学校の児童たち。全校児童でこの日は1934個の団子を作りました

発こうさせて完成です



小澤宏次（おざわ・ひろつぐ）さん
愛媛県上島町弓削島出身。1942年（昭和17年）3月11日生まれ（72歳）。NPO法人ゆげ・夢ランドの会。元教師。子どもと自然が大好き。潮が引くと、自宅そばの海岸で、ハクセンシオマネキの観察をご夫婦で楽しんでいます。

濱村壽（はまむら・ひさし）さん
愛媛県上島町弓削島出身。1942年（昭和17年）8月2日生まれ（72歳）。NPO法人ゆげ・夢ランドの会。元船乗り。ゆげ・夢ランドの会の活動の他、ボランティア活動など、積極的に地域活動をしています。

おいしいウバメガシ
～その味わい方とは？～

ウバメガシは、上島町の町木で
瀬戸内海の沿岸に広く分布しているブナ科の木です。
畑の肥料やお茶など、いろんなことに利用できる
ウバメガシについて紹介します。

文：赤近せと（上島町立弓削中学校2年生）

バベ茶の作り方

①枝をひとふりつみます。
②きれいに水で洗います。
③2～3センチメートルに切ります。
④香ばしいにおいがするまでフライパンなどでいります。
⑤やかんに水と、いったバベを入れます。
⑥火にかけ、10分ほどふっとうさせます。
⑦茶こしでこします。
⑧おいしいバベ茶の完成です！

私が住んでいる弓削島では、ウバメガシのことを親しみをこめて「バベ」と呼んでいます。バベは厳しいかん境に強く、どんぐりの実をつけます。町内の海辺などに30～60本くらいの群生を成しています。

バベは備長炭の材料に使われるのが有名ですが、他にもたくさんのことに利用できます。例えば、畑に混ぜて土質を良くすることもできますし、節分にバベの葉を燃やしパチパチと音を立てて、鬼払いをしていた地域もあるそうです。身近にできるおすすめの利用法は、バベ茶です。作り方はとても簡単です。まず枝葉をひとふりつみます。それを2～3センチメートルに切り、こうばしいにおいがするまでいります。そして10分ほどせんじて、茶こしでこしたものをいただきます。お好みにもよりますが、すっきりとした味でおいしいです。ぜひ、試してみてください。

左：海辺に自生するバベ（全体）　右上：（アップ）　右下：さわやかな味のするバベ茶

魚島のちん味!!
風に吹かれるデベラ干し!!

文：赤近せと（上島町立弓削中学校2年生）

上島町の有人島の一つ、魚島の冬の風物詩に「デベラ干し」があります。冬の間にしか作れない貴重なちん味で、日本全国のみなさんに食べてもらいたい、おいしい島の名物です。

冬の海風と太陽の力でおいしくなるデベラ

魚島は人口190人、面積1.37平方キロメートル、その名の通り漁業が盛んな魚の島です。小中学生が9人で、月に1回弓削小中学校と交流学習をしています。しかし、魚島と弓削島を行き来するには船が1日4便しかなく、45分もかかるので、船に乗りおくれないように気を付けなければいけません。

そんな魚島で作られているデベラは、魚島でとれるタマガンゾウヒラメというカレイの一種を干してできる魚島のちん味です。手の平を広げたような形をしていて、平べったいので、デベラまたはデビラといいます。とれる時期は、10月20日から3月31日までの間ですが、その時期でも海からふく風がないとくさってしまい、上手に作ることができません。底引きあみでとられたタマガンゾウヒラメは、内臓を取り出した後、えらからひもを通して、井戸水できれいに洗ったら、海の近くに干します。大きい物は1週間、小さい物は3日で干しあがります。1番小さい物は8センチメートルぐらいしかなく、ひもを通すのはとても大変ですが、捨てずに無駄なく利用します。また、雨が降る時は屋内に取りこんで、手間ひまかけて作られています。

デベラは火であぶって食べます。まず、魚焼きグリルやオーブントースターなどで2～3分焼きます。脂がじんわり出てくるのが目安です。この時、焼き過ぎや生焼け、焼いてから時間が経ち過ぎると、骨が取れにくくなるので注意します。焼いた後は、頭と大きなひれを取ってから、頭があった方から、背と骨と腹の3つに分けます。冷めると固くなるので温かいうちに食べます。そのまま食べてもいいし、しょう油とみりんを混ぜたものを付けて食べてもおいしいです。島のおばあちゃんによると、昔は、お風呂をたいた残り火であぶって食べたそうです。気になるその味は、魚のうまみがぎょう縮されていてかめばかむ程味が出てとてもおいしいです。

こんがデベラ！小さな目がかわいい

デベラは元々、とれた魚を無駄にしないという島人の知恵が生んだ保存食です。島が一番盛り上がる10月の秋祭りにも、デベラは欠かせません。冷どうしておいた去年のデベラを、天ぷらにして食べます。祭りのときは、島の女性たちが朝5時に集まって祭りのごちそうを作ります。デベラの他にも魚島でとれたタコの天ぷらやタコ飯や魚飯のおにぎりなどのおいしいごちそうがいっぱいあります。

食べ物以外にも魚島には魅力がたくさんあり、海がとてもきれいで自然豊かです。私が1番好きな場所は魚島の町並みで、細い路地がいっぱいあって探検できるし、ほっとする感じがします。そんな魚島をぜひ訪れてみてください。そして、デベラを1度は食べて欲しいです。

秋祭りのごはん。
中央下にあるのがデベラの天ぷらです

立石山の不思議
～メンヒルとイトさん～

メンヒル（立石）や子安観音、
イトさん像など、
不思議な見所がいっぱいの
生名島にある立石山を紹介します。

文：赤近せと（上島町立弓削中学校2年生）

生名島にある立石山のふもとには、地上4メートル、地下3メートルもある、とても大きな石があります。弥生時代の人々がまつっていた石と言われ、メンヒル（立石）と呼ばれています。山頂や山中にも、大きな石がごろごろあり、なぜこんな所に!?と不思議な感じがします。メンヒルの周りには、昭和初期に完成した三秀園という日本庭園があります。生名島の向かいにある因島で事業をしていた麻生イトさんという女性が作った庭園です。イトさんは、明治後期から昭和初期に活躍した女性事業家のさきがけ的存在です。当時、女性だとなめられるという理由で男装をしていたのだそうです。立石山の山道の入口には、イトさんの石像があります。立石山には、他にも子宝・安産・母乳がよく出るとお参りされる子安観音像や、33体の小さな観音像もあり、島の祈りの場として大切にされています。

三秀園の草刈りやメンヒルのしめ縄のはりかえなどは、立石観音保存会のみなさんがしています

かみじまっぷ

弓削島

1.高浜八幡神社/2.潮湯：タラソセラピー（海洋りょう法）を取り入れたおふろ。気持ちいい～/3.上弓削港/4.豊島・高井神島・魚島が見える絶景スポット/5.石灰山（219メートル）：かつて石灰を採くつしていた弓削島のシンボルの山/6.弓削小学校（P12）/7.弓削中学校/8.信号公園：信号が1つもない上島町。信号のわたり方を学習するために作られた信号機がある公園/9.松原海水浴場（P14）：夏には飛びこみ台やトランポリンなどの遊具が設置されるオススメの海水浴場/10.インランド・シー・リゾート フェスパ：オーシャンビューの大浴場が自慢のホテル/11.国立弓削商船高等専門学校（P11）/12.弓削神社/13.弓削大橋/14.しまでカフェ：島の幸が食べられるカフェ/15.ログハウス弓削：おみやげやさん/16.弓削高校

生名島

17.三秀園メンヒル（P13）/18.立石港：生名島の玄関口/19.生名保育所/20.生名八幡神社/21.生名小学校/22.生名港：今治からの船はここに着きます/23.生名橋/24.いきなスポレク公園：ウォータースライダー（夏のみ）や温水プール、野球場、アリーナ、宿泊施設があります/25.クルマエビ養殖場/26.サウンド波間田：キャンプ・海水浴に！

佐島

27.弓削保育所

28.ひみつのビーチ

高井神島

41.関道神社：ナタオレノキというめずらしい木がある神社/42.高井神灯台：ひうち灘の安全を見守る大切な灯台/43.高井神小中学校：今は休学中の学校。子どもたちが帰ってくるのを待っています

岩城島

29.岩城造船株式会社（P11）/30.長江港/31.岩城総合運動場：50メートルのプールがあるよ！/32.岩城八幡神社/33.積善山：三千本をこえる桜が花ひらく山/34.岩城中学校/35.岩城港/36.岩城小学校/37.弧隠温泉/38.岩城夕焼け海岸線/39.小漕港/40.島中にかんきつ畑がいっぱい！

魚島

44.大木ビーチ：魚島の子どもたちが泳ぐ海水浴場/45.魚島小中学校/46.亀居八幡神社/47.魚島港/48.デベラ干しスポット（P13）：太陽の光で銀色に輝くデベラは魚島の冬の風物詩/49.魚島観光センター：魚島にお泊まりの際はこちらへ！

文・イラスト：村上愛菜（上島町立弓削小学校6年生）／宗近せと（上島町立弓削中学校2年生）

しまの遊び場

文：村上愛菜（上島町立弓削小学校6年生）

私が通う弓削小学校には、プールがありません。そのため、弓削小学校では学校の横にある海で水泳の授業を行っています。水泳大会が毎年8月に行われ、4・5・6年生は、500mの遠泳、1・2・3年生は50mを泳ぎます。

このように島の子どもにとって、海は身近な存在です。私が1番好きな海での遊びは、飛びこみで、松原海水浴場によく行きます。ここは、なんと海に飛びこみ台があったり、トランポリンがあったりととても楽しいお気に入りの場所です。

飛びこみ台の高さは、潮の満ち引きで高さが変わるので、とても楽しいです。引くと結構高さがあるので、遠くから旅行で来ている人たちはだいたい満ちているときに飛んでいます。でも私は高さがあるときが好きなので、潮が引いているときでも、後ろ向きで飛んだり、わざと目をつぶって飛んだりしています。何回飛んでも楽しいです。飛びこみ台の下には、小さな魚などがいて、海の中にも楽しみがあります。潮が満ちているときには、海底まではかなり深さがあるので、下まで行くのはなかなか難しいけれど、行ってみるのも面白いかもしれません。飛びこみ台はこの松原海水浴場以外にもあるので、他の飛びこみ台も楽しいと思います。

松原海水浴場では、横にキャンプ場もあり、すぐ近くの高台には、弓削島の海を一望できるフェスパというホテルがあります。ぜひ弓削島のきれいな海に飛びこみに来てください。夏には、「ゆげシーサイドフェスティバル」や花火大会などいろいろな楽しいイベントもあります。飛びこみは、最初はこわく感じてもすぐにできるようになるので1度やってみませんか。

編集後記

村上愛菜（むらかみ・あいな）
上島町立弓削小学校6年生
学校の新聞作りとはちがう部分がたくさんあって、新聞作りはとても大変なのだと思いました。でも、いろいろな人に取材をして、たくさんのことを学べました。特に、EMの子の取材では、EMや水の大切さがよく分かりました。この新聞を読んだ人が、上島町やここで働くことなどに興味を持ってくれたらうれしいです。

宗近せと（むねちか・せと）
上島町立弓削中学校2年生
取材でお話をうかがったり、テレビ電話でみんなとお話するのが楽しかったです。新聞作りを通じて、自分が暮らす上島町には、ここにあるうみややまを大切にして、自然を守っている人、産業を支えている人がいるということを実感しました。また、その人たちへの感謝を、これからも忘れないようにしたいです。

地域コーディネーター
藤巻光加（ふじまき・みつか）

うみやまかわ新聞

中津江村は昔、雑木ばかりだったので現在のスギやヒノキの森と比べると、水の量が多かったそうです。なぜかというと、雑木林からたくさんの葉っぱが落ち、腐葉土になります。その腐葉土が、雨がたくさん降ったときなど、豊富に水をたくわえることができるからです。

そして、このたくわえられた水は、少しずつ大きな川になっていきます。この大きな川になっていくまでには順序があります。まず雨が降り、その雨水が山や森でたくわえられ、少しずつ染み出てきます。たくさんの山から少しずつ染み出てきた水が、やがて1つの小川になり、それがいくつもつながり、1つの川になっていきます。最初は、1滴だった水がいくつも合流することで川になっていくのです。

こうしてできた中津江村を通る川に、梅野川や鯛生川などがあります。さらに、これらの川が1つにまとまり、筑後川になり、海へと流れ出ていきます。

このように豊かな海の始まりは、中津江村の森なのです。そして、昔からこの地域は、林業が盛んでした。また、川を使って木材を下流に運んでいました。その運び方には特ちょうがあります。それはサーカスのように、1本の丸太に乗って、下流に運んでいたそうです。

こうしたことから川の水というのは、日ごろの生活の中で使われるなど、とても大事な役割をもっていました。だから、ぼくはこれから今ある中津江村の自然を大切にして、10年、20年先もきれいな川のままを維持できたらいいなと思います。

また、今は高れい化が進んでいるので、できたらこの中津江村に帰ってきて自然と関わる仕事をしたいと思います。

海へとつながる中津江の森

中津江村は、北部九州の真ん中にある、山に囲まれた村です。近くには「筑後川」という大きな川があり、その上流に位置する中津江村の川とつながっています。そんな中津江の森と川について、山に詳しい赤星茂重郎さんにお話をうかがいました。

文：吉井 馨（日田市立津江小中学校7年生）
イラスト：長谷部蒼吉（日田市立津江小中学校6年生）

赤星茂重郎（あかほし・もじゅうろう）
1931年（昭和6年）4月1日生まれ（83歳）。大分県日田市中津江村生まれ。炭焼きの仕事がきっかけで中津江村の山とのかかわりが始まる。地域の世話役や原木椎茸栽培など、活発に活動している。

雑木林の落ち葉が腐葉土になり、豊富に水をたくわえます

有明海へと流れる筑後川の源流地点

「津江のゆずの特ちょうと食べ方」

津江地域の代表的な特産物であるゆずの特ちょう・栽培方法・食べ方などをご紹介します。

文・イラスト：長谷部里香（日田市立津江小6年生）

ゆずは津江地域の代表的な特産物です。津江地域では、昔からかぜをひいたらゆず湯を飲んでいました。また、おふろには、おはだつるつる、とっても温まるゆず玉を入れ、生活の中でゆずに親しんできました。

食べ物では、酢の物やしめサバにもゆず酢を加えて食べています。また、ゆずの皮ととうがらしを細かく刻んで塩と混ぜた「ゆずごしょう」を作り、皮まで残さず薬味として使い果たします。

そんな津江地域のゆずについて、中村という集落でゆずを栽培している杉埜言興次さんにお話を聞きました。

ゆずの木の特ちょうは、主に3つあります。1つ目はトゲ。ゆずの木にトゲがあるなんて、あまりピンとこないかもしれませんが、ゆずの木の枝には細くするどいトゲがあるのです。

2つ目は、葉の形です。ゆずの葉は細長くて、とても整った形をしています。また、その葉っぱをちぎって、においをかいでみると、ゆず独特のかおりが鼻いっぱいに広がります。

3つ目は、酸味です。ゆずは、食べるとすっぱく、酸味が強いです。また、津江地域のゆずは、すだちよりも酸味が強いと言われているそうです。でも、その酸味がおいしさをより引き出しているのです。

ゆず作りのためには、「接ぎ木」という作業も大切です。ゆずの木がまだ小さいころ、「からたち」というかんきつ類を台木として使い、ゆずの木を接ぎ木します。通常、ゆずの実は種から育てると実を付けるまでに約10年かかると言われていますが、接ぎ木をすることによって、約5年と短い期間で収かくすることができます。接ぎ木は、ゆずが順調に育つために、また、たくさんの果実を収かくするために欠かせない重要な作業になっています。

ゆずの栽培方法

5月ごろ接ぎ木を行う → 10月下旬ごろから実が黄色に色付く → 害虫が寄ってくるため、除草などをして栽培地を守る！ → 11月ごろ、収かくという流れです。

ゆずの実は、青から黄色に段々と変化していきます。青いゆずのまま、収かくすると、普通の黄色いゆずごしょうも「青ゆずごしょう」になります。青いゆずを取り扱っている工場などでは、作業中に清々しいゆずのかおりでいっぱいになります。

津江地域のゆずは、標高400～600メートルの地帯で栽培され、塩害がないため、非常に風味の良い果汁（ゆず酢）がとれます。

かおり高い津江地域のゆずは、私たち中津江村の人の生活には、なくてはならない存在です。

杉埜言興次（すぎの・きよじ）さん
大分県日田市中津江村出身。1929年（昭和4年）8月1日生まれ（85歳）。農学校卒業後、農家の長男として家業を継ぐ。現在はゆずと林間わさびの栽培を行っている。

「からたち」というかんきつ類を台木にして、ゆずの木を接ぎ木します

ゆず商品 ～紹介コーナー～

ゆずが名産の津江には、ゆずを使った商品がたくさんあります。
そこで、ゆずを加工販売している株式会社つえエーピーの長谷部建美社長にお話をうかがいました。

津江地域にはゆずを使った商品が約30種類あります。その中でも1番人気があるのは「ゆずごしょう」です。しかし、人気商品に至るまでには大変な苦労があったそうです。東京のデパートで販売をした際、本来、薬味として使用するゆずごしょうを、ゆずごしょう単体で試食してもらったため、お客さんから「からすぎて食べられない」という不満が多く、全く売れませんでした。それでも、長谷部建美社長は生産者や地域に対する強い思いがあり、販売方法を工夫して、あきらめずに販売し続けました。その結果、「ゆずごしょう独特のからさ」が認められ、テレビや雑誌で紹介されるようになりました。

長谷部社長は、「ゆずごしょうだけでなく、日本のスパイスと呼ばれるわさびや山椒の商品開発、販売に力を入れていくとともに、まだまだねむっている地域の宝をほり起こしていきたいです」と、今後の目標を話してくださいました。

長谷部建美（はせべ・たつよし）さん
1952年（昭和27年）12月19日生まれ（62歳）。中津江村役場の職員として、日田市（旧中津江村・上津江村・前津江村）の第3セクター「株式会社つえエーピー」の設立準備にたずさわる。2006年（平成18年）に日田市を退職後、株式会社つえエーピーの代表取締役に就任。

ゆずはちみつ
（のど飴タイプドリンク）
850円（税別）／380g

ゆずごしょう
300円（税別）／40g
400円（税別）／60g

ゆずペッパース
400円（税別）／60g

ゆずレッドペッパース
400円（税別）／60g

原木しいたけと菌床しいたけを育てる工夫

普段何気なく口にしているしいたけ。このしいたけの栽培方法には、原木しいたけと菌床しいたけという2種類があり、どちらも育てるのに、とても手間がかかります。どんな風に育てられているのか、それぞれの違いをご紹介します。

文：吉井巽（日田市立津江小中学校7年生）

【原木しいたけ】

原木しいたけとは、木に菌を打ちこみ自然のかん境で育てるしいたけ。特に中津江村では、クヌギの木を使っています。

原木しいたけの作り方は、まず初めに切ってきた木を一定の大きさにし、そこにドリルで穴を開けます。その後、ピストルの玉状の木の棒に菌を入れて、ドリルで開けた穴に打ちこみます。この菌が入った木の棒から、しいたけが生えてきます。しいたけは湿度や寒暖差によって、刺激を受けて生えるため、寒暖差の激しい中津江村は原木しいたけ栽培に適しています。温度調節や湿度管理のため、ビニールハウス内で栽培しますが、下の方はビニールをかけずに自然な形で栽培するという工夫をしています。

今回ぼくたちが訪ねた長谷部重孝さんは、干ししいたけ用の原木しいたけを作っていました。干ししいたけ用の原木しいたけは水やりの際に、原木を水にひたしたりせず、シャワーのような蛇口から水を出して、じわじわと木の中に染み込ませるそうです。原木しいたけは1つの原木をうめつくすほど、たくさんのしいたけができるので、見た目にも圧巻です。ぼくは、今回長谷部さんの話を聞いて、しいたけ作りはとても奥が深いんだなと思いました。

長谷部重孝（はせべ・しげたか）
1938年（昭和13年）3月24日生まれ（76歳）。大分県日田市中津江村生まれ。1970年（昭和45年）から原木椎茸の栽培を始め、現在も露地とハウスでの栽培を続けている。

左：原木しいたけで使うクヌギの木。運ぶだけでもかなりの重労働です　右：原木しいたけは一つの原木を埋め尽くすほど、たくさんのしいたけができます

【菌床しいたけ】

菌床しいたけとは、「菌床」で育てたしいたけです。「菌床」とは、広葉樹という葉っぱが広くて大きな木のおがくずと、米ぬかやフスマなどを混ぜてブロック状にしたものを言います。

菌床しいたけの特ちょうは、だいたい大きさが縦15センチメートル、横25センチメートル位と小さめなので、せまいところでも栽培することができます。また、菌床しいたけの栽培は、木を切り出したり運んだりする原木しいたけ栽培と比べ、手軽に作ることができます。しかし、菌床しいたけはとてもせん細で、安定した品質と収かく量を得るために、温度と湿度の管理がてっ底されています。

今回取材させていただいた吉井さんは、キノコバエやナメクジになやまされていました。特にナメクジはとても大きく、しいたけを食べてしまうので大変だそうです。

そしておいしいしいたけの見分け方をうかがいました。ポイントはしいたけのかわき具合。水分が少ないしいたけはおいしく、逆に水分が多いとしいたけの味がうすくなり、あまりおいしくないそうです。料理では、天ぷらやバター炒めがとてもおいしく、これも水分が少ないものを選んだ方が良いそうです。

最後にぼくは、今回菌床しいたけを取材して、菌床栽培は原木栽培よりせまい場所で作ることができ、また、重労働もないけれど、温度調節など細かな管理が多いので、結局はどちらのしいたけ栽培もとても大変な仕事だと感じました。

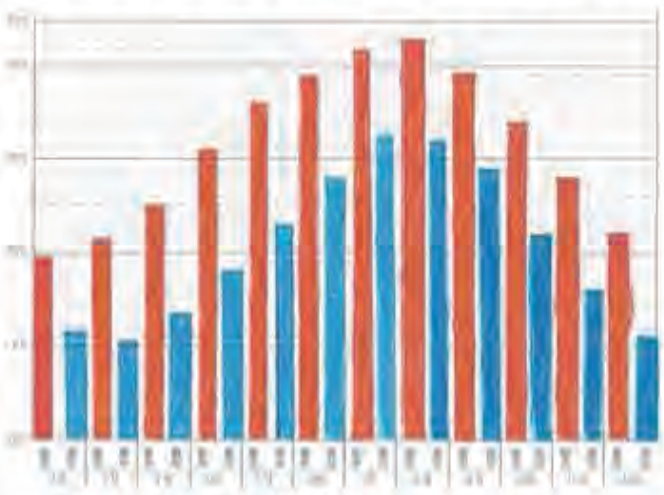
吉井将弥（よしい・まさや）
1973年（昭和48年）8月31日生まれ（41歳）。大阪府豊中市生まれ。1997年（平成9年）に、空気と水がきれいな中津江村に移住。大分県椎茸品評会で12年連続1位を獲得。

左：広葉樹のおがくずや米ぬかなどでできたブロック状の菌床
右：限られたスペースでも育てられますが、温度と湿度の管理が難しいそうです

最大20度!?中津江の寒暖差

夏はとっても暑い！冬はとっても寒い……。意外と知られていない「津江の寒暖差」にせまります！

文：長谷部重孝（日田市立津江小中学校6年生）



気象庁ホームページ「過去の気象データ検索」より
大分県日田市の平年値（年・月ごとの値）

みなさんは、九州の気候といえばどんなことを思いうかべますか？多くの人は「1年を通して暖かくて、過ごしやすい気候」と答えるでしょう。しかし、上の日田市の1年間の最低気温と最高気温の平均値を示したグラフではわりと寒暖差があることがわかります。1番寒暖差が大きいのは4月の13.3度差で、日田市でも10度以上の寒暖差があります。私が住んでいるここ、大分県日田市中津江村は九州の真ん中に近い所に位置していますが、私の家の近所を温度計で測ったところ、1番寒暖差が大きかったのは、11月28日。朝は3度でしたが、昼間は23度。なんと20度も寒暖差がありました！ この時、温度計を見た私はビックリしました……。中津江は朝方は特に冷え込みますが、今年の秋は昼間でも、夏のような気温でした。

しかし！良い事もあります。この寒さのおかげで津江地域の「しいたけ」はかおり高くうまみがぎょう縮されているのです。また、ゆずやお茶などもこの寒暖差をうまく利用して栽培しています。この「寒暖差」が山に囲まれた津江地域の大きな特ちょうです。

永瀬さんの作品

中津江村ではチェーンソーアートが盛んです

中津江だからこそできる！

森の芸術チェーンソーアート

文：長谷部重孝（日田市立津江小中学校6年生）

中津江には、豊かな森があり、「チェーンソーアート」という芸術が盛んです。そのチェーンソーアートを探るべく、「中津江チェーンソーアートクラブ」会長の永瀬正直さんに、お話をうかがいました。

みなさんは「チェーンソーアート」という言葉を聞いたことがありますか？チェーンソーアートは、その名の通りチェーンソーを使って丸太を様々な作品に仕上げる「木の芸術」です。中津江村には「中津江チェーンソーアートクラブ」というグループがあり、様々な大会へ出て、優勝するなど、多くの実績を残しています。そこで、同クラブの会長を務め、12年間チェーンソーアートを続けている永瀬正直さんにお話をうかがったところ、チェーンソーアートの木材はやわらかく加工しやすい日田スギをメインに使用しているそうです。

村の面積の90％が森林という中津江村は素材となる木材も豊富！木材の新しい可能性を感じさせるアートパフォーマンスです。

永瀬正直（ながせ・すなお）
1952年（昭和27年）12月10日生まれ（63歳）。大分県日田市中津江村生まれ。中津江チェーンソーアートクラブ会長。2002年（平成14年）にチェーンソーアートと出会い、中津江村の杉で作品作りを行う。

「中津江村のうみ・やま・かわマップ」

中津江村は、水がきれいで豊かな自然に囲まれた地域です。
主な特産には、しいたけやゆずがあります。
また、鯛生金山という金山があったり、2002年日韓ワールドカップの時に、カメルーンのキャンプ地になった鯛生スポーツセンターなどがあります。
そんな中津江村を地図でご紹介します。

文：吉井 響（日田市立津江小中学校7年生）
イラスト：吉井 響・長谷部蕾吉（日田市立津江小中学校6年生）

ゆず園（P16）
取材でうかがった杉藤喜興次さんのゆず園です。津江のを代表する特産物・ゆずはココでとれます。

伝来寺
古い歴史ある寺で、九州最古の文化財といわれる庭園を見ようと、毎年たくさんの観光客が訪れます。

鯛生スポーツセンター

鯛生金山
最盛期は年間に2.3トンの金が採れた金鉱山。1972年（昭和47年）に閉山され、現在は地底博物館や道の駅として整備されています。

菌床しいたけ（P17）
取材で見学させていただいた赤星仁一郎さんの栽培場所。

日田市立津江小中学校
2014年に中津江村立津江小学校が中津江村立津江中学校の校舎に移転して、小学校と中学校が合併。小中一貫校となりました。

わさび
九州唯一のわさびの生産地である中津江村では、村中さまざまなところでわさびを育てています。
（この場所は、日田市が整備したわさび畑です）

原木しいたけ（P17）
取材でうかがった長谷部重孝さんの栽培場所。

株式会社つえエーピー（P16）
豊かな自然が息づく里では、村人が愛情をこめて、わさび・ゆず・こんにゃく・しいたけなどを育てています。そんな農産物を全国にお届けするのが、つえエーピーです。

坂本休前村長に中津江村についてうかがいました

（僕たちが暮らしている中津江村について以前村長を務められていた坂本休さんにお話を伺いました。）

文：吉井 響（日田市立津江小中学校7年生）

中津江村は、昔から自然が豊かで、林業が盛んな地域です。第二次世界大戦前は、広葉樹の天然林で巨木が多く、きれいな水が豊富にありました。しかし、戦後の復興のために広葉樹はばっ採され、建築材として質の高い杉が植林されたので、かつて広葉樹だった森林のほとんどが杉に変わりました。中津江村の下流の日田には、多くの製材所が集中していたので、成長後に切られた杉は川を使って運ばんされました。

他にも林業以外の産業として、中津江村には、鯛生金山という金山がありました。今は、金の採くつは行っていませんが、全盛期には3000人の労働者がおり、1トンの岩から20～30グラムも採れました。通常の金山の3～4倍の量だそうです。だから東洋一の金山と呼ばれていました。採くつした岩から金を精製するのに水銀が使われていて、その水銀を川に流していたので、川の水がよごれ、魚がたくさん死んでしまったそうです。村の人たちが、「これではダメだ」と思い、川をきれいにしていきました。こうした努力で今、中津江村の川はとてもきれいになっています。

中津江村の水がきれいになる一方で、林業・植林が進んで、広葉樹の森が昔に比べてとても減ってしまいました。そのため、森の保水力が弱くなり、水の量が少なくなってしまったそうです。そんな時、前村長の坂本さんが有明海の漁師さんから、水が少ないから海苔が育たないということを聞き、上流に位置する中津江村で森を作る取り組みを始めました。この取り組みは、「200海里の森」といい、中津江村の森林から出た水が海まで行き、日本の領域、つまり200海里の中で魚をたくさん増やし、水産業をもっと発展させようということで名付けられました。最初はなかなか協力してくれなかった有明海の漁業協同組合とも連けいして、今では森の規模もどんどん大きくなっているそうです。

ぼくは、今回坂本さんのお話を聞いて、中津江の魅力や良さが、改めてよく分かりました。同時に、その裏では、坂本さんそして中津江村のたくさんの人たちの努力やがんばりがあったからこそ、今の中津江村の魅力や良さがぼくたちや全国の方に伝わるんだろうと思いました。

坂本休（さかもと・やすむ）
1930年（昭和5年）10月8日生まれ（84歳）。大分県日田市中津江生まれ。中津江村助役、第四回 理事長、1996年（平成8年）から2005年（平成17年）まで、中津江村村長を二期務める。

編集後記

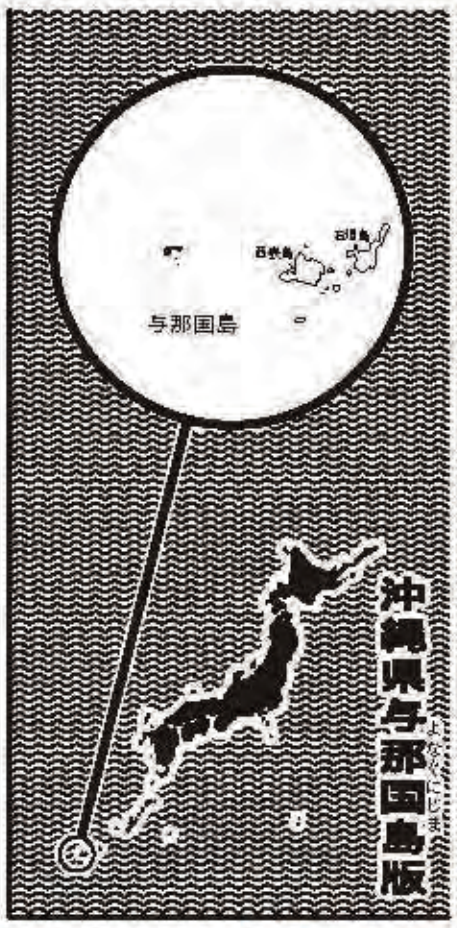
吉井 響（よしい・ひびき）
日田市立津江小中学校7年生
原稿を書くことが思った以上に難しくてびっくりしましたが、自分なりにがんばれたと思います。この新聞作りを通じて、これまで知らなかった中津江村のことを学ぶことができ、とても楽しかったです。

長谷部蕾吉（はせべ・かのん）
日田市立津江小中学校6年生
このプロジェクトを通じて、日本の水のつながり、中津江村の人々の温かさを知ることができ、私自身も成長できたと思います。いろいろな取材をして、自分が住んでいる村のことを深く考え、これまで以上に中津江村が好きになりました。

地域コーディネーター
河井昌猛（かわい・まさたか）
日田市地域おこし協力隊

協力
笠原浩（かさはら・ひろし）
財団法人日田市公民館連合事業団
中津江公民館 館長

うみやまかわ新聞



大きなカジキが泳ぐ与那国島

与那国町漁協同組合長の嵩西茂則さんに与那国島で釣れるカジキについてお話を聞きました。カジキについていろいろ知ることができました。

文：前外間澪巳（与那国町立与那国小学校6年生）

与那国島は日本の最西端にあり、東京から南西に約1900キロメートル、石垣島から南西へ117キロメートルで、台湾からは東に111キロメートルのきょりにあり、周囲27・49キロメートル、面積28・88平方キロメートルの小さな島です。

取材をしたこの日に釣り上げられたカジキ

島の近海には「カジキ」という魚がたくさんいます。カジキは暖かい海を高速で回遊する、大型の肉食魚で長い角が特ちょうです。大きいものでは、体長4メートルになり、小型のカジキでも1メートルをこえます。

与那国島では、カジキがたくさん釣れます。与那国町漁協同組合長の嵩西茂則さんの話では、代表的なカジキは、クロカワカジキ、シロカワカジキ、マカジキ、メカジキで、そのなかでも1番多く釣れるのがクロカワカジキです。

与那国島でカジキがたくさん釣れる理由には、与那国島が日本で1番西の果てにあることや、黒潮にのってカジキが南から来ること、カジキを専門に釣る漁師がたくさんいることがあげられます。カジキが好きな温度は20度から25度ぐらいで、海面から30メートルぐらいの深さにいますが、水温が高くなりすぎると下にもぐってしまいます。昔は夏に多く釣れていましたが、現在は11月から3月ごろに多く釣れているそうです。

与那国島にいる現役の漁師さんは32名。与那国町漁協では1年間に約1000本のカジキを釣り、一番多いときで1200本ものカジキを釣っています。与那国島で釣れたカジキは、地元で競りをして市場や魚屋さんに持っていかれる他、島外にも送られます。一番近いところは沖縄本島で次に九州の熊本の市場に行き、本州の石川県や静岡県にも送られます。

カジキは100キロから150キロ入るカジキ専用のダンボールに氷と一緒に入れられ、飛行機で輸送されます。その日に釣ったカジキは、翌朝9時45分の石垣島経由便と、2便となる12時発の沖縄本島行き直行便で那覇に送られ、次の日の朝に競りにかけられます。嵩西さんは、「日本の1番西にある島は物を売るときに苦労します」と話します。私は、多くの人に与那国島でとれたおいしいカジキを食べてもらいたいです。

嵩西茂則（たけにししげのりさん）
沖縄県与那国町出身。1962年（昭和37年）5月2日生まれ（52歳）。2014年6月から与那国町漁業共同組合長。

水抜けされたカジキは、このように角と内臓をきれいに落とされ冷凍保存されます

カジキの釣り方をご紹介

与那国島では1本釣りでカジキを釣っています。漁師さんが行っている、カジキの釣り方について、紹介します。

文：前外間澪巳（与那国町立与那国小学校6年生）

船からカジキを釣っている姿

カジキの釣り方は、主に3種類あります。1つ目は、船の先に人が乗って泳いでいるカジキを追いかけてモリでつく漁法。2つ目は、大きなあみを引っ張ってカジキをとる漁法。3つ目は、与那国で行われている1本釣り漁法です。

与那国島の漁師さんは、1人で船に乗りカジキを釣りに出かけます。1本釣りでは、まずエサとなるカツオを釣ります。カツオは、浮き漁礁の周りに集まっていて、いつでも釣れる状態です。漁師さんたちはそこで釣ったカツオを針にかけて200～300メートルたれ流してカジキがいそうな所を船でグルグル引っ張り続け、カツオが生きているように見せかけます。そして、カジキがカツオに食いついて針がカジキにかかったら、巻き上げる機械を使ってカジキを船に引き寄せて、モリで頭をつき刺します。モリの先には、太いロープが付いているので、一度射ぬいたらぬけません。カジキを自力で引き上げたら、鮮度が落ちないように太陽の光からカジキを守るカバーをかけて急いで港に運びます。

「生活の源」田原川の今と昔

崎原用能（さきはら・ようのう）さん
沖縄県与那国町出身。1947年（昭和22年）9月11日生まれ（67歳）。2007年から与那国町西自治会長就任。2009年より与那国町教育長に就任。

私が暮らす与那国島の祖納（そない）集落に流れる田原川について、歴史に詳しい与那国教育委員会会長の崎原用能さんに話を聞きました。

文：徳吉快来（与那国町立与那国小学校6年生）

全長約800メートルほどの田原川には、様々な生物、島の人との関わりがたくさんあります

田原川は、与那国島で一番大きな川です。与那国島の東部にある祖納集落にあります。川の長さは800mくらいと言われていて、標高231mの宇良部岳の麓から、ナンタ浜に向かって流れています。

与那国教育委員会会長の崎原用能さんによると、田原川には昔、うなぎ、小さな赤いカニ、スッポン、フナ、どじょうなどがたくさんいたそうです。しかし今では、川が下水や農薬でよごれたり、「ジャンボタニシ」や「テラピア」などの外来種が増えたせいで、ほとんどいなくなってしまいました。また、田原川にたくさんいて与那国の人たちが食べていた「ンビナガ」という貝も、ほとんど見られなくなりました。今は、地元の人たちが元の田原川にもどそうと外来種の駆除などの活動をしています。

1889年（明治22年）、田原川では川の流れを変える改修工事をしました。工事をする前までは、川が海より低く、あっちこっちから海へ流れ出ていました。そのため大雨や台風がくると、いつも水ぼつしてしまいとても不便でした。川の工事には、2000人もの島の人が参加して、わずか13日間で完成しました。この工事によって島の生活がとても楽になったので、大浜当行さんを中心に工事を行った島の人の名前が刻まれた石ひが、今でも残っています。

田原川の水は、生活の源として洗たくやイモ洗い、水くみなどに使われていて、現在は、農業用水や生活用水に使われています。

与那国島には「アラミディ」という水の神様に感謝する行事があります。アラミディというのは、「新しい水」という意味です。水のありがたさを知るために、旧れきの8月最初のみずのえの日に行われ、川の清掃も行われます。

崎原さんの話を聞いて、もっと昔のようにきれいになったらいいなぁ～と思いました。

島で1番大きな田原川の上流で行われる豊年をお祈りする祭り「アラミディ」祈願と川の清掃をします

与那国島のまつりごと

文：徳吉快来（与那国町立与那国小学校6年生）

私たちが暮らす与那国島には色々なまつりごとがあります。
与那国島の祭りや行事に詳しい、
久部良（くぶら）公民館長の
長濱利典（ながはま・としのり）さんに、
お話をうかがいました。

マチリ

与那国島には、四つ足動物を食べてはいけない時期があります。その時期にはマチリという島の安泰と住民の健康を願う祭事があり、3カ月前から四つ足動物を食べてはいけません。マチリで祈願する具体的な内容は、異国人・大国人退散、牛馬繁盛、子孫繁栄・嫁取り・婿取り・五穀豊穣、航海安全など、5つの集落（久部良・東・比川・嶋仲・西）でそれぞれちがいます。

豊年祭（ウガンフトゥティ）

豊年祭は、与那国島の言葉でウガンフトゥティといい、十山神社という神社で島の豊作を願う祭りです。ウガンフトゥティとは「お願いを解く」という意味で、前年の豊年祭で祈願したことを解き、新たに豊作をお願いします。チマティ（前夜祭）には、米13俵・塩・クバの葉餅・生魚・カニ・ニンニク・料理5品・酒・神酒・花米など、31膳を供えます。豊年祭は毎年行われますが、3年に1回、東と西に分かれて大つな引きをします。

ムヌン

ムヌンは、稲作の生育に合わせて行われる祭りで、田植えから収かく、蔵に納めるまで、1年間で4回行います。1回目のカドゥムヌン（物忌み）、2回目のッァバムヌン（草葉物忌み）では、虫害が出ないように祈願します。3回目のフームヌンは穂物忌みという意味で、島にかんばつや大風が起きないように、島民安泰・繁栄・豊作などを願って行います。ドゥヌムヌン（島の物忌み）は最後の祈願として4回目に行い、稲の収かく後にねずみやすずめなどの被害がないように願います。

シティ祭

シティ祭は、9月己亥という日から3日間行われます。毎年、各家庭の門や車のサイドミラーなどに、魔除けとして「ンバカズラ」という植物を巻き付け、獅子の神様をおむかえして、島内の悪魔を追い払う行事です。シティ祭では、死者に負けないように、どの家でもごちそうを用意してみんなで食べます。また、村の青年が獅子にふんして、ドラや太鼓に合わせておどり、島内を清めます。

与那国島の「島唄、三線」

与那国島にはいろんな島唄があります。代表的な歌について與那覇有羽さんにお話を聞きました。

文：前外蘭巳（与那国町立与那国小学校6年生）

与那国島には、教訓歌、お祝いの時に歌う歌、子守歌、労働歌などの島唄があります。歌と三線が得意な與那覇有羽さんにお話を聞きました。

「でんさ節」と言う教訓歌には「あったらあったで喜ぶな、なかったらなかったで落ち込むな。大きな海の潮でさえも、満ち引きがあるんだよ」と言う意味があります。

お祝いの歌では「チディンクドゥキ」があります。チディンクドゥキは「田原川の水が酒に変わらんか、お米は金のように、浜の白い砂は、米がたくさんでくる」という意味があり、与那国島の自然の豊かさと豊作を祝って、豊年祭で歌われます。「チディンクドゥキの歌では、自然をほめることで自分たちにも良いことが訪れると考えています」と有羽さんは言います。

子守唄には、「ナガヤマヌカミフトゥギ」や「ハララルデー」などがあります。ナガヤマヌカミフトゥギの歌詞には「仕事に出ているお父さんとお母さんが早く家に帰ってこられるように、雨を降らさないでください」と書かれていて、小さな子どもたちも口ずさんだりしています。ハララルデーは、子どもをねかし付ける歌で人によっては歌の内容を変えることもあります。

労働歌は、「ドゥンタ」や「バガフニヌディラバ」や「マイカリヌディラバ」などの歌があります。ドゥンタは豊年祭3日目の終了後に歌われます。バガフニヌディラバは若い船を意味する歌で、進水式に歌ってその船に乗る人が安全に帰って来れるように船をほめました。マイカリヌディラバ（米かりの歌）は、米かりの時に歌われていた曲です。この歌は三線を使わずに歌だけで歌ったりし、豊年祭でも米をかっているようなおどりをつけて歌われます。

三線を弾くときにみるエエ四（クンクンシ）という楽譜です。

與那覇有羽（よなは・ゆう）さん

与那国島の伝統工芸「花織」

与那国花織のなかでも代表的な織物です。与那国織はおよそ500年前から作られています。与那国花織には代表的な柄が5つあり、なかでも「ダチン花（8個の花）」「イチチン花（5個の花）」「ドゥチン花（4個の花）」の3つが代表的で、ほかに「イルク花」や「ミング花」があります。

与那国花織のほかにも、「与那国ドゥタティ」「与那国シダティ」「与那国カガンプー」があり、これを合わせて与那国織と言います。この中で、一番高品質なものが与那国花織ですが、一番手間がかかるのはカガンプーで、たくさんの時間がかかります。

大まかな作業工程は5つあり、1つ目は染料をつかって糸を染める「染色」。2つ目は、反物の長さをきめるのが「整経」。3つ目、機にのせる前の縦の糸を整える作業が「縦巻」4つ目は、上糸下糸を順番よく通す作業「綜絖通し」。5つ目は、織り機を使った「織り」の作業です。1つの反物を織るには、早くても準備で1ヵ月、織りで1ヵ月、合わせて2ヵ月かかるそうです。

与那国島の草木で染めた糸で織物をつくる与那国町伝統工芸館でお話を聞きました。

文：徳吉咲来（与那国町立与那国小学校6年生）

「染め」は草木染めで、与那国島に生えている草や木で染めています。

- フクギ…黄色っぽい色
- ガジュマル…茶色っぽい色
- シャリンバイ…赤っぽい色
- ハイビスカス…薄か黄

①「与那国花織は与那国織の中で1番高品質。織物の生地は35～38万円します ②麻でできた素朴な織物で昔の人は、寝巻き着として着ていました ③おどりときに、頭に巻く布で、絹や麻でできています ④夫婦が、寄りそっている様子を模様にした帯です ⑤工芸館のみなさん。左から前外蘭洋子さん、前盛美和さん、徳吉さゆりさん。与那国町伝統織物振興組合には、約50人の組合員がいます

与那国の長生きの秘訣・薬草!!!!!!!

与那国の昔から食べられている薬草を紹介します。

文：徳吉咲来（与那国町立与那国小学校6年生）

【長命草】方言名でグンナと呼ばれており、神への捧げものとして祭事などでは欠かせない植物です

【クシティ】方言名をクシティといい、パクチーのこと。ここではジナの生話としょう油で和えて食します。島で愛されている食材です

【チンバナ】方言名でチンバナといい、血圧降下に効果があると言われ、実をつないで飾り物を作ったりします

【アギダングサ】方言でアギダングサ、アギダン（トンボ）がよく止まる草という意味。あせも、しっしんにも効果があると言われています

薬草の食べ方に詳しい請舛敏子さんに話を聞きました。与那国島の代表的な薬草は、長命草です。長命草は学名をボタンボウフウといい与那国島の方言でグンナといいます。海辺に生えており食べ方は、刺身と和えたりみそ和えなどにして食べていたそうです。また神様にお供えするには、大切な植物です。名前に長い・命・草と付くので請舛さんに「長命草は本当に長生きするんですか？」と聞いてみると「長生きする。ぜん息の時には、お茶にして飲んで治した」と言っていました。

与那国島で昔から食べているクシティは、セリ科の一年草でタイではパクチー、英語ではコリアンダー、中国では香菜、与那国島ではクシティと言います。与那国の人の、ほとんどの人がクシティが好きでサラダや和物にして食べていて、畑で育ています。他にも、「オオバコは乾燥させて飲んだり、チンバナは血圧を下げたり、アゲダングサは、鍋でせんじて皮ふにぬっていました」と請舛さんが教えてくれました。

請舛敏子（うけます・としこ）さん
沖縄県与那国町出身。1926年（昭和元年）1月生まれ（89歳）。生まれてからずっと与那国で生活しており、19歳で結婚。農業などを営みながら、古くからある与那国の習慣・生活リズムを実践。

与那国島MAP

文・イラスト：前外間清巳、徳吉咲来(与那国町立与那国小学校6年生)

与那国島は日本の最西端にあり東京から2,037kmで、台湾から111kmです。
時々台湾が見えることもあります。
島の面積は28.88平方km、周囲は27.49km。人口は約1,500人です。
緑がいっぱいの島で、馬、牛が道のすぐそばでのんびりと過ごしています。
主な産業は、サトウキビの栽培、酒造り、ダイビング、長命草の栽培、カジキ漁などで、豊かな自然があるからこそできる産業があります。
ここでは与那国島について紹介します。

1. 与那国漁協
久部良集落にあり大きなカジキやいろいろな魚が釣れます。大きいもので体長4.0m、体重400kgです。

2. 与那国空港
与那国島から石垣島まで往復2本、与那国島から那覇(沖縄本島)まで往復1本の飛行機が、毎日飛んでいます。

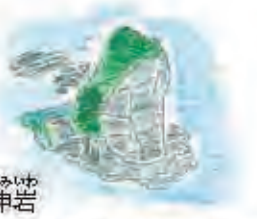
7. 伝統工芸館
与那国島の自然植物で染色する、与那国島でしか作れない与那国織りを作っています。

6. ナンタ浜
祖納集落にある浜です。

13. うらちゃん
与那国町立与那国小学校のマスコットキャラクターで、宇良部岳をイメージして作られました。

3. 灯台(東、西)
島の東と西の端にひとつずつ灯台があります。西は「いり」と読み西崎灯台、東は「あがり」と読み東崎灯台といいます。

5. ナーマ浜
久部良集落にある浜です。



9. 立神岩
島の南にある高さ30mの岩で島の人たちは「神の岩」と読んでいます。

11. あぐの木
樹高10m、幹周り10m、枝張25mの大きな木です。沖縄の名木百選に選ばれています。

10. 海底遺跡
海底遺跡は新垣吉八郎という人が発見しました。人が作ったのか自然にできたものかはまだ不明です。

8. 宇良部岳
与那国島で1番大きな山です。
高さ231.4mです。

4. ヨナグニサン
日本で一番大きな蛾で、与那国島の方言でアヤミハビルといいます。

12. 与那国島にいる「ヨナグニウマ」は日本在来馬で、普通の馬より小さい親しみやすい馬です。

与那国島のいろいろな生き物を紹介します

文：前外間清巳(与那国町立与那国小学校6年生)

与那国島には「ヨナグニサン」のようなめずらしい生き物がたくさんいます。
与那国の生き物を20年間追い続けている村松 稔さんに話を聞きました。

与那国島にはこの島にしかいない生き物がたくさんいます。その理由は、与那国島が海で閉ざされている離島で、亜熱帯性気候の水にめぐまれているので、生き物にとって住みやすいからです。

与那国町教育委員会の村松 稔さんによると、名前に「ヨナグニ」がつくこん虫だけでも20種類から30種類もいるそうです。ヨナグニサンは、世界最大級の蛾で羽を広げたら24センチメートルにもなります。ヨナグニサンは、与那国島の方言でアヤミハビルとも言われています。

与那国島の海岸には、いろいろなモダマの種がひょう着します。村松さんが見せてくれたコウシュンモダマは、八重山地方に多く分布していて、山の谷に生えており、その種が川を下って海に流れていき、どこかの浜に流れ着いて運が良ければ生えるそうです。種の長さは3～5センチメートルで、幅も3～4～5センメートルぐらい。種をみがくとツルツルになりました。他にも、とても希少なエサキタイコウチやヨナグニマルバネクワガタをはじめ、与那国島の山、谷、湿地、川にはたくさんの生き物たちがいます。

上から：村松さんが見せてくれたコウシュンモダマは、長さが大体50センチメートルぐらいで、種の大きさは、4～5センチメートルぐらいでした！ノブオオオアオコメツキの体は、光沢のあり青色で、とてもきれいなこん虫です。暑い6～8月に見られます！ヨナグニマルバネクワガタは、山地のイタジイという木に生息しています。11月ごろになると地上を歩き回ります！エサキタイコウチは、日本で与那国島にしかいない生き物です。水の中にいないと死んでしまいます

与那国町教育委員会の村松稔さん

編集後記

徳吉咲来(とくよし・さくら)
与那国町立与那国小学校6年生
田原川や祭りのことは、春秋から知っていたけれど、歴史とかは全然知りませんでした。うみやまかわ新聞を通じて、自分が知らないことを学べたのでよかったです。

前外間清巳(まえぼかま・きやみ)
与那国町立与那国小学校6年生
最初は不安もありましたが、どんどん進めていくうちにとても楽しくなりました。自分の住む地域には、海や山や川があって、いろいろな生き物がいることなどを知りました。

地域コーディネーター
松田修太(まつだ・けいた)
NPO法人与那国いとなみネットワーク

徳吉咲来 記者

前外間清巳 記者

うみ・やま・かわを越えて

島をつなぐ空の玄関口・与那国空港

東京から南西に約1,900キロメートル、日本の最西端に浮かぶ沖縄県与那国島。広い海に囲まれたこの島にとって、空の玄関口・与那国空港は他地域と島とをつなぐ、なくてはならないものです。そんな与那国空港で働く上地善勝さんと福里美奈さんに、うみやまかわ新聞編集部与那国支局の徳吉咲来・前外間清巳記者がお話をうかがいました。

日本最西端の与那国空港

お話をうかがった上地善勝所長と福里美奈さん

与那国空港について教えてください。

上地善勝さん（以下、上地）：日本の一番西に位置する空港で、年間利用者数は、約7万3000人（2013年）。与那国島と那覇、石垣島を結ぶ、1日往復4便の飛行機が運航しています。お客様は島民の方が中心ですが、観光、ダイビングや釣りなどのお客様も多くいらっしゃいます。

上地善勝（うえち・よしかつ）さん
琉球エアーコミューター株式会社　与那国空港所長。沖縄県石垣島出身。1960年3月4日生まれ（54歳）。1978年6月入社で、2013年5月20日より与那国空港勤務。

普段はどんなお仕事をされているのですか。

上地：お客様をおむかえし、チケットの発券、座席の指定、お荷物のお預かり、また飛行機までのご案内などの「旅客係」。その他、飛行機にのせる郵便物などの重さをはかり、飛行機にのせる量を計算する「貨物係」、貨物ではかった荷物や、お客様からお預かりした荷物をチェックして、飛行機に搭載する「運送係」、気象状況の確認や、貨物・乗客の重量をまとめて、飛行機全体のバランスを調整する「運行係」という仕事があります。

他の空港と比べて、与那国空港ならではのことなどありますか。

上地：飛行機にはお客様だけでなく、荷物ものせるのですが、与那国島ではカジキが荷物として運ばれてきます。大きいもので200キログラム以上あるので、これを担当の2名で飛行機に運び込むのがとても大変。小さい島の小さな空港ですので、みんなで団結してがんばっています！

空港で働いていて、よかったと思うことは何ですか。

福里美奈さん（以下、福里）：与那国島の方は、生活の足として飛行機をご利用されています。例えば、おばあちゃんが病院に行きたいけれど、ずっと飛行機が満席で予約がとれないこともあります。空席待ちなどで乗れた時、「ありがとう」っておばあちゃんが言いながら乗るのを見ていると、ここで働いていてよかったな～と思います。

どんな思いを持って、働かれていますか。

福里：私自身、石垣島で生まれ育ったので、飛行機は生活に欠かせないものでした。だれかに会いに行くとか、どこかに遊びに行くとか、飛行機はそれに乗って行くことで楽しさや喜びが生まれる乗り物だと思っています。その始まりと終わりを担うのが空港。お客様の旅の始まりと終わりをいいものにしたいなと思います。

福里美奈（ふくざと・みな）さん
JTAサザンスカイサービス株式会社与那国空港所　主任。沖縄県石垣島出身。1983年6月13日生まれ（31歳）。2006年4月入社で、2014年1月から与那国空港勤務。

与那国島の好きなところ、自慢できるところはどこですか。

上地：この島の風景。とても美しいですよね。あとは、祭りや伝統行事をすごく大切にしているところ。それを子どもたちにしっかりと伝えていっているところが、すごいですよね。

福里：人と人との結びつきがとても強いところです。3月はお別れの季節で、島からはなれる先生だとか、そういった方を見送るのに、本当に子どもからおばあちゃんまで見送りに来られるんです。みんなで作った横断幕を持って、おばあちゃんなんて涙を流しながら。生まれ育った石垣島でも同様のことはありましたが、ここまで幅広い年れい層の人が集まるのは、小さな与那国島ならではのいいところだなと思います。

①腕章を渡され、普段は入ることのできない空港の中へ ②ホワイトボードにはその日の発着便が。朝礼時に全員で確認をするそうです ③飛行機のバッテリーを充電するための機械 ④飛行機へ積み込む荷物を流すコンベア ⑤手荷物受取所は、与那国ならではのサイズ感 ⑥手荷物受取所のコンベアの裏側。ここで荷物を積み降ろしてコンベアへ流します ⑦このカートに荷物をのせて、飛行機に積み込む作業を行うそうです ⑧冬はカジキがたくさん釣れるので空港もはんぼう期。取材時も3本の大きなカジキが運ばれて来ていました

取材を終えて

徳吉咲来（とくよし・さくら）
私は、初めてカウンターや貨物など、与那国空港の中を見ることができました。上地所長からのお話で、団結と安全という言葉がとても印象に残りました。団結はみんなで助け合いながらという意味で、安全はお客様が安全に飛行機に乗れるようにという意味だそうです。

前外間清巳（まえほかま・さやみ）
今日、与那国空港で取材し、空港で働くみなさんが、お客様が安全に飛行機に乗れるように作業したり、いろいろとがんばっていることを知りました。とてもよかったです。また、普段入ることができない空港の中を見ることができ、楽しかったです。

Supported by
JAPAN AIRLINES / JTA / RAC
明日の空へ、日本の翼
www.jal.co.jp

やってみよう！

『うみやまかわ新聞』を読んで イメージしましょう

各地の子どもたちがつくった『うみやまかわ新聞』を見比べながら、
海と島でできた日本や自分の暮らす地域についてイメージしてみましょう。

Q 各地の「うみ」「やま」「かわ」はそれぞれの地域にどんな恵みをもたらしているだろう？

Q 自分の暮らす地域にはどんな「うみ」「やま」「かわ」があり、どんな恵みがあるだろう？

Q 自分の暮らす地域と他の地域にはどんな「つながり」や「ちがい」があるだろう？

『うみやまかわ新聞』をつくってみませんか？

『うみやまかわ新聞』は小学校高学年を対象にした教育プログラムです。
地域学習やキャリア教育などの総合学習プログラムとして、
「多面的・総合的にものごとを捉える力」「コミュニケーション力」「他者と協力する態度」
「つながりを尊重する態度」「情報メディアの基本知識」などを
総合的に学ぶことができます。
詳しくは『うみやまかわ新聞』公式サイトをご覧ください。

http://www.umiyamakawashinbun.net

『うみやまかわ新聞』とは？
当事業は2014年に「日本財団海洋教育促進プロジェクト海と地域のつながりを見つける『うみやまかわ新聞』の制作事業」としてスタートしました。2014年版には5地域、総勢38名の小中学生が参加。各地域の教育機関、団体、民間コーディネーターの協力のもと、生徒たちが「うみ」「やま」「かわ」に関するものごとを集め、離島経済新聞社の編集長、編集スタッフ、カメラマンなど、新聞づくりのプロが講師を務めました。

【お問い合わせ先】
npo@ritokei.com

『うみやまかわ新聞』
発行：NPO法人離島経済新聞社
東京都世田谷区三軒茶屋2-49-6
http://www.ritokei.org/
発行日：2015年1月31日
印刷：朝日プリンテック
協力：日本財団、日本航空株式会社

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

離島経済新聞社